統制機構諜報部のハザマさん

作者さん

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
統制機構諜報部のハザマさん

【Ｎコード】
Ｎ５６８１Ｑ

【作者名】
作者さん

【あらすじ】
ちょっと考え付いたネタです。俺の知ってるハザマさんはこんなんじゃない！と思う人は注意してください。

すてーじ1（前書き）

ジャンル的には一部勘違いものになるかもしれません。

すてーじ1

あー前回ももよく働きましたね。と、地図を見ながら草原の上に立つハザマです。苗字はありません。

相変わらずの記憶喪失であるのですが、仕事はどんどん舞い込んできます。統制機構ホントに鬼畜ですね。

さて、現在少尉の私ですけど、現場を右へ左へ送られてます。記憶喪失の人に容赦ありません。なんというブラック…いえグレー企業。まあ良くも悪くも軍なんてこんなもんですから。仕方ないっちゃあ仕方ないんですよね。

世界虚空情報統制機構諜報部、と言う長っ苦しい名前ですが、立場は結構重視されますし危険も多いです。
充実してると言えば充実してますか。楽しいとか思いたくはありませんけど。

「あとは体質が治れば完璧なんですけどねぇ……まあ人生そこまで上手く行くわけないですか」

給料も良い、待遇は……まあ良い、友人関係は……壊滅的。諜報部って独特のネットワークは有りますけど、友人かどうかと聞かれると……。
あれ？　なんか泣きたくなってきた。なんでせっかく多分成人過ぎた大人が夜は一人寂しく酒盛りしてるんでしょう。

私、中尉になったら部下と一緒に酒盛りに行くんだ……

とりあえず無駄話はさておき、

「にしてもまーた面倒な任務ですねぇ……と言うかいつこの命令受け取ったんでしょう？」

そう、最初に言いましたが、私は任務のために都市から少し離れた田舎っぽい場所へと来ていました。

任務内容は、この付近の教会に預けられた術式適正のある子供の確保。とりあえず戦力または統制機構にとって有害物質になりえる子供をさっさとこっちに取り入れろ、と。そういうわけです。

まあ教会の責任者に事情説明をしてから引き渡してくれたら一番楽なんですけどね。

「楽じゃないから仕事って言うんですよ」

事情説明すればやれ統制機構は権力を持ちすぎだとか、それ人さらいだとか、味噌糞言われ過ぎなんですよ。なんという公職アンチ。公職のはずなのに気分は会社の営業マンです。

嗚呼、早く出世したい。中尉ぐらいになって人を顎で使いたい。現場に向かうのもめんどくさい。

気が進まないながらもようやく教会が見えてきたので、少し歩くペ

ースを上げます。

と、そうして少し歩くと私の視界にまだ思春期入る前ぐらいの、金髪の男の子が入りました。
あー、あれが件の子供ですか。
とりあえず外堀から攻略しましょう。

と言うわけで私はぼんやりしているその子に近づいて……

……
あーヤバい、出てくる。
任務中は勘弁して欲しいんですけど。と、言っても発作のようなものだから仕方ないですね。

あーお願いしますから私の今後の衛士生命が続くような行動をお願いしまーす。

で、そう思ってから私は意識を失いました。

まあいきなり感がありますよね。
そうです、私の最大の悩みで有るのは、時々気を失う事なんです！
所謂二重人格？　どうやら周りでも私の態度は変ってないようなんですけど、意識がばっさりと無くなって、そのあと勝手に身体は動

いているそうなんですよ！

ちょっと昔快楽殺人犯だった医師に尋ねてみると、怨霊みたいなのが身体に居るそうなんですね。なんでも前例が居るらしいですし。

これが友人作れない理由なんでしょうか。結婚ぐらいは望んでますけど部署と体質が重なって難しくなりました。あー残念。

と、ここで話は戻ります。

そう、今回この草原に来たのは二回目なんですよ。

こうして任務中に意識を失った後は大抵報告した後のせいで、私が現状把握していないんです。

だから休日を使って現場に戻る事も少なくない、というか当たり前の事になってます。とは言え任務では無いのでちょっとした旅行みたいなものでしょうか。

多分趣味と聞かれたら、旅行と迷い無く言いますね。もしかすると失った記憶とかの手掛かりになるかも知れませんから。

と、やっと建築物が見えてきました。

なにしろ教会ですからね。日差しを浴びてより黒く見えますよ！

……うん？

地図を確認。
周りには建造物はありません。
地図を確認。
見えてきた建造物の場所である事は間違いありません。
地図を確認……

「きょ、教会が焼却されてるーっ！！？」

え、何やってんの？　え、何やってんの？　え、何やっちゃってくれてるんですもう一人の私ーっ！

どどどどういうことなんですかれれれ冷静になれ私に炎の術式適正なんて有りませんし気分はピーターパンのワイヤーアクションしかできませんし武器なんてワイヤーと特注品のバタフライナイフしか持ってってませんしーっ！！？

なんということでしょう。私の眼前に見えるのは骨組み以外が炭となった教会だったんです！

いや確かに似たようなことは有りますよ？　とある弱小組織の情報収集中に何故か構成員の首を撥ねてあったり、経費で料理代を賄って私が怒られたりと、不利益行為は確かに有りましたよ！？

いや、これは無い。何考えてるんですかもう一人の私。
いや確かに統制機構に入らない術式適正の高い人物は、凶悪な犯罪者になる可能性が高いのでほとんど士官学校入りを強制してますけど…。
笑い事で済まないでしょうこれは。

とりあえず教会に近づいて見ます。いやコレ教会じゃないですよ。ただの炭ですよ常識的に考えて。

で、教会付近にある物を見つけました。

それは教会の一番上にあっただろう十字架で、今は少し土が盛り上がった場所に突き刺さっています。

……ええ、見れば分かりますよ。お墓ですね。

流石に罪悪感が湧きます。
こう見えても軍に居ますから人は何人か殺してますし、情報収集はストーカーみたいなこともさせられてまし。
が、こうした事に慣れるのもきついです。

とりあえずお祈り程度はしておきましょう。
十字架って事は確かキリスト教でしたっけ？

「そこで何をしている」

と、そこでお祈りしようとして、心臓が飛び出そうになりました。
落ち着け、落ち着け、冷静になれ。
今日の私の姿は制服じゃありません。帽子はかぶってますけどちょっと改造した武装スーツです。
……どう見ても不審者ですね。
いや、流石にいきなり何かされるということも無いでしょう。
いつもの０円スマイルを顔に張って振り向きながら、
「いえいえ、少しここの墓にお祈りをしていたんですｙ」
ええ、その瞬間警告が頭の中に響き渡って懐からダガーナイフ二丁を取り出したのは間違いじゃ有りません。
何しろ眼前に見えたのはよーく斬れそうな刀が二振り、ダガーナイフに遮られて首の皮一枚の所で止まってましたから。
「あぁっ！？　何しやがんだよこの糞猫がっ！？」
すぐにその物体をヤクザキックで引きはがし、少し見えた三角の出っ張りの出てるフードのネコミミから、ついそんな言葉が出てましたね。

「テルミ！　貴様セリカの墓に何をする気だった！？　いや、貴様今度はいったい何を企んでいるっ！？」

テルミって誰ーっ！？
つーかなんで怒ってるのこの獣人はーっ！？お祈りで怒るってどんだけ宗教家なんですかーっ！？

目の前に居たのは器用に二足歩行してる三毛猫……じゃなくて白と焦げ茶の二毛猫。
フードを被り、二振りの剣を持ち、片目は傷がついて潰れてる……
……

んー？　なんか文献で見たことがあるような外見ですよね？
だれだったかなー？
その文献は六英雄の伝記だったようなー？　六英雄？

……うん？　獣兵衛さん？　まさか無いですよね？

「ハッ、見て分かんねぇのかよ獣兵衛ちゃんよう！　お祈りだよ、お・い・の・り！　まあーどんな顔だったかなんざ覚えちゃいねーんだけどな」

とりあえず、こちらは強気で行きます。
資料に顔写真はあった気はしますがホントに覚えてないんですよ。
後は鎌かけですね。相手が獣兵衛という言葉になんらかの反応を示すでしょうから。

「テルミ……貴様」

……あ……まさかの本人ご登場してたんですか。殺気はさらに濃厚になってます。
いやこれでも諜報部ですから人は結構見てるので、嘘かどうかぐらいは分かるんですよね。
で、どうやら本人らしいんですよ。いやー、六英雄の本物なんて始めてです。サインとか欲しいなー。

……うん、一言言わせて下さい。

なにやっちゃってんのテルミちゃんよおおおおおおおお（名前は初耳）！
なんで六英雄の知人殺してんのおおおおおおおお！？
え、セリカって誰？　此処のシスター？　もしかして殺したのって獣兵衛様（既に敬称）の身内だったりするんですかーっ！（だいたい合ってる）

「ま、こんだけ立派な墓がありゃあきちんと天国いけたんじゃねえの？　あ、いやもう魂も再利用されちゃってるかもしんねぇな！」

ま、まあ流石に教会の象徴の十字架をあしらえたお墓なら、次は良い人生送れるでしょう。
あーいや、キリスト教だと普通に神様のところでしたっけ？
魂の廻る輪廻転生の考え方はたしか仏教でしたね。これは失敗。

「貴様、セリカの魂を……いや、そうだった。貴様はそうやってナインを殺した時もそうして笑っていたな。……言葉は要らん、貴様はここで斬る」

だからなにやっちゃってんですかテルミィィィィィィ！！！！
今度の殺気ヤバイですって。魂がなんたらかんたらなんて獣兵衛様そんな宗教に染まり切っていたんですか！？
いやそもそもナインってだれですかひょっとして獣兵衛様の恋人殺したりしてんじゃないですよね！？（ドンピシャ）

おい早く出てきてくださいよもう一人の私改めテルミさぁぁん！？
　こんな時だけ寝てないで弁解してください後生ですから！？　もう一人の人格の名前を知れた対価が私の命ってどういう事ですか！？

……反応無し！笑えません！

……落ち着け、考えるんです。
どうやらテルミさんはだいぶ大物のようです。私が記憶を失う前、ちょうど二年以上前に色々やってたのでしょう。
相手は地上最強の生物、そしてどうやらテルミさんに知人を殺されたらしいです。ならば……

「ああ、別に俺は構わねーけど？　だがな、俺に構ってて良いのかなぁ？　また一人、お前の大事な小犬ちゃんが居なくなるぜ？」

はい終わった！　私の人生終わりました！

ハッタリかますなら小犬じゃなくて小猫でしょう！？　相手猫なんですから！　そんな異種間同士の愛情がそう簡単に作れるわけないですよね。（そうでもない）
い、言い直さなければ……

「いや小犬じゃな「ラグナの……いや。残念だったなテルミ、今はレイチェルに任せている以上、貴様がどんな駒を使おうが手出しはできん」

該当した！首の皮一枚繋がった！
良かったまだ言葉は要るようです。
レイチェル……ラグナ……今度は誰ですかいったい。
六英雄の知り合いですから、吸血鬼とか死神とか言われてももう驚きませんよ。（ドンピシャ）

……ハッタリの基本はより相手の行動が無意味だと思わせ、さらに背後を塞ぐこと。

つまり、背後に敵が居ると思わせれば良いのです。
つまり架空の人質を、架空の援軍を作ること。

行動方針が決まって落ち着いてきました。

「ふむ、まあ良いでしょう。私と今此処でやり合えば貴方には勝てませんから。が、例えば『アレ』を復活させてラグナちゃんの所に向かわせたとしたら、貴方はどう行動するのが最善だと思います？」

「『アレ』？　……！？　まさか『彼女』、か？」

ヒャッハー！！　来たぁあああっ！　完っ壁に術中にハマった！
『彼女』が誰かは知りませんけど、流石に英雄！強敵に何人も会ってますから復活という単語を聞かせれば完璧ですね！

「ええ。早い所行くのが賢明ですよ。私はもう此処には何の用も有りませんし。ああ、花程度なら供えるべきでしょうか？」

わざとらしく余裕を見せて帽子を直します。
見れば隙だらけ、でも何かが有るように思えてくるという疑心暗鬼。
揺れたなら、私の勝ちです。

「テルミ……くっ」

と、それが最後の言葉で獣兵衛は風になったようにすっ飛んで行きました。

あっという間に見えなくなる獣兵衛様。マッハの速度が出てるんじゃないかと思えるほどの速さで消えていきました。

「た、助かりました……？」

一気にプレッシャーから開放されたせいでしょう、すとん、とその場に腰を下ろし、足腰が立たなくなりましたね。
が、相手は六英雄、こっちは一般ピープル、強気でいられただけ私スゲエエエと思いますよ。

「に、逃げますか、ええ」

と、がくがく震える足を持ってきた糸で固定して、腕の力で足を動かしながら都市にへと戻りました。
時々、後ろから見えなくなったときと同じ速度で獣兵衛様が追いかけてくると考えると、震えが倍増しましたが、なんとか船着場まで到着して無事帰還。

で、しらない内に下の方を大洪水していたのを気が付いた時、感じた事は、生きてて良かったぁ、でしたね。

今日もなんとか仕事よりきつい一日が終わりました。
できることなら、明日は楽な仕事が来ますように、と。

ん？　そういえば何で獣兵衛様にはあれだけハッタリが上手くいったのでしょうか？

ーーーーーーーーーーーーーーーーー

「無事かっ！？　ラグナ、レイチェル！？」

「ん、どーしたんだよ師匠。今日は自主練じゃなかったのか？」

獣兵衛がラグナの元へとたどり着いたとき、何も無かったかのように二人は過ごしていた。

「どうしたのかしら獣兵衛さん？　あなたがそんなに息を切らして迫るなんて、らしくなくてよ」

ラグナは鍛錬を、レイチェルはティータイムを、その光景には襲撃の後は欠片も見えはしない。
その事実に大きく息を吐いた獣兵衛は安堵の息を吐いた。

「……嵌められた、か。いやそうでもないな」

「おーい師匠？」

苦々しい様子の獣兵衛に鍛錬の手を休めラグナは首を傾げた。

「ああいや、なんでもない。無事であったならそれでいい」

ラグナは、変な師匠だ、と呟きまた鍛錬へと戻っていく。

が、逆にレイチェルは興味深そうにこちらを見ていることに気が付き、歩みを寄せた。

「（セリカの魂の回収？　…いや、微かな残滓程度しか残っていない状態で奴から見れば利用価値は少ない。何が目的だ？）」

どの道あった事をレイチェルに全て話す事になるのだろう。いずれは話さなければならないが、シスターの事を今のラグナに話すわけにはいかない。

早くしろ、と催促する視線が強くなり、獣兵衛は一つため息をつく。どちらにしても今はどおう考えようとも仮定でしかない。そう割り切り自ら動こうとはしない吸血鬼の元へと向かった。

すてーじ2（前書き）

この小説の傾向はシリアスです。

すてーじ2

六英雄に狙われるという失態を犯してから3年、いつも通り諜報活動や身体を乗っ取られ仕事がキングクリムゾンで完了しているハザマです。

なんと、今回は喜ぶべきことがありました。
な、なんと！　苦労した甲斐があって中尉まで昇進したんです！
これで部下も付けられて対人コミュニケーションも取れ、現場の仕事からおさらばできますよヒャッハー！

……そう思っていた時期が私にもありました。

なんというか……昇進して権利やらなんやらが重くなった分、自分で書類を作れるようになってしまったんですね。
そう、今まで大して作らなかった書類の量が増加、現場の仕事はそのまま。もともとグレー企業だったのが完璧にブラック企業になった瞬間でした。

部下？　大尉になってからですって。笑わせないでくださいよ。
それに稀に任務に同伴する少尉さんとかから、中尉がいるから大丈夫だろう、と期待の目で見られるのが辛いのですけど。そしてその油断した少尉Aは任務に失敗しましたしね。階級イコール強さって、そんなゲームじゃないんですから……。

「と言うか、たまに乗っ取られる方が任務達成が早いって勘弁してくださいよ……」

「……ハザマ、飲みすぎだ。その身体はそんなアルコールに耐え切れるようにはできていない」

はい中佐ぁ、と使い慣れない敬礼をする私。
そんな私を見て金髪のオッサンはやれやれといった様子でため息をつきました。
あーやべ、オッサンとかいったら中佐に怒られちゃいますねぇ、あっはははははｈ

「安心しろ、聞こえている」

ぶふぁあ！

いや、思いっきり吐きました。もう目の前でお酒を出してくれる店のおじさんに吹きかける勢いで。

こここ声に出てたってこここことですか？

「ししししし失礼しましたクローバー中佐」

「かしこまるな。お前に敬語を使われるのははっきり言えば気持ちが悪い」

「おおおおう、すみませんねぇ」

よかった、中佐が寛大な人でよかった。
良いが回っていたのが一気に吹っ飛びましたかからね。
この人、レリウス・クローバー中佐ですが、技術開発部の責任者のような人らしい、というか人です。
勿論、私とは階級がひどく離れてますし、なんとか統制機構ないでまともに顔を合わせられる交友？関係がある人物です。

こうして私がお酒に誘えるぐらいの人なんて他にはいませんよ！
……あ、泣きたくなってきた。どうして成人通り越した若者がオッサン誘って酒盛りしているんでしょう。
しかも普通のオッサンならまだ良かったんですよ別に。隣にいるオッサンは遙かに階級が離れた上司でマントを纏い仮面を付けた変人ですよ？　蝶人とか言って外で露出してませんよね？　身内が泣きますよ。

「ハザマ、聞こえているぞ」

「！？　うおえっっほぅ！？　ゲホッ…ゲホッ…すみません。自重します」

「安心しろ、今度雑務を送ってやる」

はい消えた私の次の休日今消えた！

大体技術者を誘うのは間違っていると思うんですよね、アルコールとか手がぶれるようになりますし。誘っておいてなんですけど。
良い年していると思われる外見ですから、こうして私に付き添うより家族の下へ行った方がいいんじゃないでしょうか？

「家族、か」

「ええ。あー私も早く結婚したいんですよね。何かと苗字なしっていうのは面倒なんですよ」

名前を書くたびに苗字は？って聞かれるのも結構きますね。そんな心臓に毛が生えるようなごつい心臓してませんから。

ふむ、と、意味深長そうにレリウスさんは呟くと、普段はあまり飲まないはずのお酒にゆっくり手を付けました。
大きな手には少し小さいぐらいの東大陸系のコップに少しづつ注ぎ、一気に喉に入れてました。

「あークローバー中佐は家族のご様子なんかはどうです？」

何と言うか、こちらから話題を振らないと反応してくれないんですよね。
黙々と進める酒盛りなんてぼっちの時だけで十分です。

「……今年息子が士官学校へと入学した。」

へぇ～レリウス中佐って子供が居たんですね。
良いですよねぇ子供と言うものは。対人関係が壊滅状態の私にとっ

ては、家族なんて素晴らしいものじゃありませんか。

「それはそれは。おめでとうございます。あ、因みにどこの学校なんですか？」

「ああ……」

ボソりと口から出た言葉は比較的有名な学校でした。

あーたしか記憶によれば結構良いとこの士官学校だったような記憶があります。

十二宗家の娘さん息子さんがなんかも多く通ってる名門の所ですね。

やはりクローバー中佐も中佐という地位に着けるぐらい有能な人ですから、息子さんも凄いのかもしれませんね。

そういえば私の出身って何なんでしょう。謎ですね。自分の事ですけど。

どこであろうと電話一つ来ないということは、過去の私の学生時代の友達は、一人も居なかったんでしょうか？……電話に出んわ。……精神的に心臓に来ますね。

「あー、良いですよねぇ家族。私も家族とは行かなくても恋人……いえそこまで高望みせずに、せめて友人…いや仕事仲間ぐらいの関係にはなりたいものです」

「果てしなく低い繋がりになっているが？」

いやそれさえも不足しているこの身でして……

友人というか同僚は基本的顔を合わせませんし、情報の管理はしっかりしないといけないので友人とか作れませんし。あ、お酒が眼にしみる……。

いっそ脱統制機構しますか？　……あー引き継ぎとかしてもらえる人が居ません。うん、私泣いて良いでしょうか？

一応恩もありますし、私が諜報員であることによって犯罪を減らすことができるので、統制機構も悪くは無いんですよ。

…人間関係以外は。一つにして最大のネックですけどね！

レリウスさんも友人が多い方ではないですけど、部下は結構居ます

「それに比べて私は……この前なんてテルミが勝手に経費で買った飲食代に私が怒られましたし……なんですか究極のゆで卵一個１００００て、高すぎなんですけど。しかも店の全部買い占めないでくださいよ、ついでに言うなら一個ぐらい取っておいてくれても良いじゃないですか。なんで気が付いたらダストボックスの中身が卵の殻だらけで、その後上司に怒られるのは私なんですか」

……うん？　諜報員生命は途絶えてませんが、結構問題起こしてますよね。

揚句の果てには六英雄から狙われてますし。

……あー酒盛り中には考えないようにしてたのに。

六英雄に狙われるって黒き獣ぐらいじゃないんですか？　そりゃあ恋人殺されたら英雄だってキレますよ。
えーとナイ…ナイ…ナイフさん……でしたっけ？
あーナイが名前に付く有名な昔の人って言ったらナインさんしか居ませんけど、人間ですしとっくに死んでますし。多分違う人ですね。

というかこれで統制機構から抜けるなんて考えはオシャカになりました。組織の後ろ盾に今日だけは感謝します。
とはいえそれも『私』ではありますから。受け入れるしか無いんですよねぇ……

あぁ～何だか眠くなってきました。
願うなら、目覚めた瞬間獣兵衛様のどアップに対面するような状況になって居ませんように。

ーーーーーーーーーーーーーーーーー

レリウスは自分の帽子をアイマスクにして眠るハザマを見て、……
特に何もしなかった。
ただ思った事は、不思議な存在だ、とただ一言考えただけだ。
魂という存在が何処に有るのか。
一つの説として意思の魂、肉体の魂と、一つの人間には二つの魂が

存在するという考え。
例え肉体を失っても意思の魂は暫く漂い続けて消滅には時間がかかる。

だが……例えば意思の魂を消滅させたとしても、肉体さえあれば魂はまた再生するのではないか。

まだレリウスは知る余地ないが、恐らく未来で死神が出会う悪魔は正にその一例。
そしてそれがほんの細胞の一片だったとしても、有機質の集合体だった身体は意思を見せた。

だから例え作り物の身体であったとしても、魂を自ら作り出す事は可能ではないか。

「実に興味深いな」

いざとなればまた新しい器に移し替えれば問題はない。
テルミの計画には多少の誤差が出るにしても、その辺りに関与するつもりも無い。

だからハザマと言う男を今暫く観察する。
何を意識して創った訳でも無い。
だが一つの器に中身は二つ、それをして尚両者の魂は溢れず混ざらない。

成功品でもあり、失敗作でもある。

レリウスはカウンターから立ち上がり、チップの意を込めて多めに支払うとそのまま出口へと向かった。

……爆睡するハザマを放置して。

すてーじ3

こんにちは、統制機構以下略のハザマです。
今回は任務のためにイカルガへやって来ました。
イカルガでの戦争は終わりかけていて、来るまでには捕虜の兵士も大分疲労しています。
相手連邦の代表者のテンジョウさんは降伏しようとしてるらしいのですが、統制機構は『え、なにそれ聞こえない』と言って戦争を続行してます。
あー、いわゆる新しい術式の実験台ですね。

まあそれはさておき。な、なんとですよ？　今回ね任務成功の暁に大尉へと昇格させて貰えるんですよ！
大尉、それは私有権限の上昇。
大尉、それは新任部下の配置。
大尉、それは私がレッツ書類ワーキングと友人作りの大一歩！

つ・ま・り、来た！　私の時代来ました！　これで部下が貰える！
　仕事仲間が増える！

……そう思っていた時期が私にもありました。
あれ？　なんでしょうこのデジャヴュ。

命令　テンジョウの身柄の確保。

いやいやいやいや、ああ久しぶりにテルミさん抜きに言いたいことが有ります。せーの

上の方々馬っっ鹿じゃないですかぁあああ！？

諜報員一人で戦争の主犯扱いの人を捕まえられるなら戦争なんて起こりませんから！

瀕死体のイカルガなんてどうせ、諜報員何人か飛ばしとけば確保できるんじゃねーの？　とか上の人達絶対そんなノリですよ！　いつの時代のカミカゼですかもう！

というか帝もこんな命令にサインしないで下さい！

『この辺の書類にサインしておいてくださいねー』『ん』みたいなノリで書かれませんよねこれ。

忍者（本職）の里の城に簡単に入れたらこちらと苦労しませんから！

と、内面では興奮していた私ですが、なんでも新しいタイプの隠密の術式が含まれた魔導具が完成したらしく、私はその適性があったらしいのですね。

つまりその隠密の魔導具を使うことで、簡単に侵入する事が可能になった、というわけです。

おお、素晴らしい。意外と下の人に対しての考えがあったんですか。

「いや、ない…ですね。あったな、ら人にこんなこ、と、やらせません」

こんなこと、……現在私、ナイフとワイヤーだけで城壁ロッククライミングに挑戦中です。

私の武器は基本ナイフの投合とワイヤーを使った暗殺なんかの戦い方がメインなんです。

ちょっとワイヤーに術式をかけて、これまたナイフに術式をかけて壁に投合し、ワイヤーの伸縮を使って高速移動したり高いところに登れたりするんですよ。
気分はピーター・パン、実態はターザンのそれは、実に便利なんですよね。
……今回のように術式を使いすぎれば隠密効果が無くなって、射られた矢で針ネズミにされるような状況じゃなければ。

「いい、加減……笑えないん……ですけど」

ええ、この魔導具、マントの形状をしてるんですけど、やけに重いんです。多分３０キロぐらいですか。
おまけに命令で、試作品だから壊すなってお前……
水の張った外堀でマジで溺死しかけたのは良い思い出です……というか大部分の体力はそれで削られました。

なのにあと登る城壁は６０メートルもあるのですが。

憂鬱になります。

テルミさーん交替してくださいよー。私知ってるんですよ？　貴方が移動とか面倒くさいから私にいつもこうやって任せてるの。
変な命令なんかだと私に書類を処理させてるんですし、少しぐらいは面倒なこともしてくださいよー。

……反応有りません。
しまいには泣きますよマジで。
周りからの話ですと、テルミさん私と物腰変わらないらしいですけ

ど…絶対性格悪いですね。

で、命綱は無しのために安全第一で登ること数十分。
途中罠があって壁を押した際に矢が飛んできたり、水が吹き出たりしたのはビビりました。
落ちたら死にはしませんが術式が解けて『くせ者ォーっ！』の叫び声と共に針ネズミにされてたかもしれません。

「……」

すみません、何も言う気になれない程疲労が溜まりました。
何とか足場が有る場所まで来れた時、四つん這いになって呼吸を整えてました。
外堀では体力を、ロッククライミングでは筋肉を酷使したせいで、正直動きたくありません。
魔導具のおかげで隣を走る忍者等には全く気がつかれてませんけど、生きた心地はしませんし……というかこれなら正門から堂々と入ればよかったです。
罠と格闘する方がよっぽど楽ですよ。先程からこの魔導具を脱ぎたい衝動が溢れています。

「……さて、いつまでもこうしてる訳には行きませんか」

呼吸を整え辺りを見渡して私は立ち上がりました。
ここの領主テンジョウさんは武道の達人らしい、つまり私が敵うかどうかと聞かれれば難しいです。

それなら降伏をはっきりとさせて油断した瞬間を狙う。
もしくは他の人がここまで攻めてきたのを諜報部だと言って確保する。
……よし、さっそく行動しましょ……

……あーあーあーちょっとー。テルミさーん？　今はまずいですってば！　というかロッククライミング中に起きてたなら交代してくれればいいじゃないですか……いやそれはいいんですけど…やめて！　貴方命令書読んであるんですか！？　魔導具イカレますから術式やたらめったら使わないでくださいよーっ！

……

クックックック…お勤めご苦労さん。
こんなクソ重てぇ魔導具背負うとか馬鹿やってんなぁーアイツもよぉ。
まあ、穏便にって考えなら間違いじゃねぇから問題ナシなんだが。
さーてそろそろキサラギ少佐がお出でになる頃だ。そん時の為に保険をかけに行くとしますかねぇ。

『！！　くせｍ』ザクッ

「ピーピーうっせぇなぁイカルガの連中は」

お、ナイフ喉にに当たった５０点。

『者ｄ』ザクッ『何ｍ』ザクッ『出ｔ』ザクッ

目、額、心臓と突き刺さって合計は４５０点となりまぁーす。
っとまあ遊んでばかりいられねぇよなぁ。ほっといたらゴキブリのように湧くコイツらを片付けるだけの力は今は無ぇしな。

「んじゃまっ、行かせてもらうぜ」

物質強化、伸縮の術式っと……ナイフを投げて、即席ウロボロスってか？

さーて、領主サマに会いに行きますか！

ーーーーーーーーーーーーーー

太陽がさんさんと降り注ぐその場所に私は居ました。
喉がカラカラになりながら、砂に足を搦め捕られ歩いています。
そこは砂漠で暑い日差しが身体を焼き、私は苦しそうにしていました。
……と、そこで気がつきました。
これはれっきとした夢、ただの夢です。
そうと分かれば起きることは容易く、私は意識を無理矢理押し上げるように目を開けると……

「へ、部屋が燃えてるーっ！？」

前回は燃え尽きた後で、今回は現在進行形で火が辺りを燃やしています。
……って、命令は！？　テンジョウさんは！？　新型試作の魔導具は！？
前も教会燃やしてましたしどんだけ火災が好きなんですかテルミさんは！？
魔導具については術式を使うとイカれるので、使わないように言って有りますけど今は装着していないようです。
私は少し辺りを見渡して…

「って、魔導具が炭になってるーっ！？」

ちょっとぉおおおおおおお！？　魔導具壊すなって命令で言われてたじゃないですか！　だから命令書を確認しろと言った（思った）んですけど！？
素材が布じゃないマント型の魔導具ですから火は大丈夫かと思いきや、プテラノトンの手の化石のように外殻だけになって燃え尽きていました。
…ん？　ちょっと待って下さい。
今気がついたのですけど、ここは敵陣のど真ん中であって、今まで私が隠れていたのは魔導具のお蔭様だったのですが……

ガラッ『居たぞォー！此処だァー！！』

……ええまあ、反射的に私は足を踏み出して部屋から飛び出てました。

ダッシュで駆け抜ける私、大地で大量の動物が駆け抜けたように廊下へ響く足音。

それと同調して響く怒声と私の悲鳴。

『アイツだっ！　絶対に逃がすな！』

『アイツに仲間はやられたんだ！』

『バング様の仇ーっ！』

テルミさぁあああああんんっ！？　だからアンタは何してくれてるんですかもう！？

諜報員が率先して人殺してどうするんですか！？

映画のスパイじゃないんですから、戦いなんて前線の衛士に任せておいてくださいよ！　ってそれだけ殺したって事は絶対に術式使いましたよね！？

減っている昨日磨いたお気に入りのナイフ、何故かこちらに飛んで来る釘、上から落ちて来る釣り天井、おまけに言うなら消える床という名の落とし穴。

予想外でした。罠に引っ掛かりたく無いからロッククライミングした筈なのに、どうして罠と格闘しながら忍者とレーシングしている

んでしょうか？　どうしてこうなった。

向こう側に見える壁にワイヤー付きナイフを投げ、伸縮の術式で一気に距離を稼ぎワイヤーを切るの繰り返し、なのに忍者はそれの速度について来ます。
速く駆け抜けてくるその光景は、獣兵衛様の姿を思い出して薄ら寒いモノがありました。

ようやく見えた窓から外へと脱出、……出てきたのは地上４０ｍ上空。近くに高い松の木が無かったら、もう一度城内へナイフを投げてリターンしなければいけませんでした。いや、よかった。

帰りの便では下が大洪水しかけている事に気が付きましたが、トイレの中で思ったことは、生きてて良かった、でした。
ああ、それだけ苦労したのに報告書には失敗の二文字を書かなければいけないと考えると憂鬱といわざるを得ません。

それでも生きているだけマシですね、と。私は帰りがけに自分へのお土産を買って帰りました。

すてーじ4

イカルガ内戦も終わり、適当な命令を受けながら過ごしている私ハザマです。

イカルガ内戦はイカルガの方々をボロボロにして国が崩壊し、残った人達はどうやら第十三階層都市カグツチへと行ったようです。
と、そうなればそこがイカルガのお店や文化が広がり、むしろその都市は豊かになるかもしれません。戦争の利益の一つですね。人が多く死んだのは笑えませんが。

さて、その時の新聞の一面と言えば、なんと言っても英雄ジン＝キサラギ少佐。
どうやらテンジョウさんはこの人にやられたようで、民衆ではなく統制機構に英雄と奉られています。なんという自作自演。まあ情報操作に諜報部も一役買わされましたが。

英雄扱いのついでに少佐になったジン少佐は、師団長にまで出世しました。
因みに少佐には秘書官まで付くらしいですね。キサラギ少佐マジもげろこの若造が。七年程下請やって大尉まで行けた私への当てつけですか？

テンジョウさんは戦争の責任として死んだ姿を出されてませんから捕まっただけかもしれません。
とにかく私の任務は失敗、憂鬱な気分で技術開発部に行きますと、『データは送信されてるので問題ありませんよ』ですって。どや顔で言われましたよ。殴りたくなりました。

と、まあ一応任務は成功のため評価も上がりましてですね……ななななんと！　私大尉に昇格しました！
卒業者を取るため少し遅れますが、部下が入ってくるんですよ！

これでようやく書類仕事メインの楽な仕事になれそうです。
部下を何人も地方の現場に派遣して、私は書類を作って部下のサポート。現地だと命懸けでしたけど私はのんびり部屋で仕事の合間を縫ってプライベートなことに回せそうです。
いやーもう楽しみで仕方ありません！　長年の夢がようやく叶いますよ！

……そう思っていた時が私にもありました。あれ、なにこのデジャｖ（略

人数一名。

ま、まあー思ったより少ないですけど、部下ができるだけ有りがたいですよ？
ええ、それだけならまだしも命令が来たんですよ。
『新任衛士のサポートのため、任務で現場へと派遣するさい上官一名を付けるように』
……ええ、完璧にイジメですよね。上官も何も私しか居ないじゃないですか。人数が少ない理由はそれですか。

イカルガとの戦争でだいぶ衛士が少なくなったので、新任衛士を大切に育てませしょうと、今年からの導入になったそうです。
要するに私は階級アップで書類仕事が増えて、その上に現場まで行って働いてこいと。責任者出てきて下さい。……いや責任者は帝でした。やっぱりいいです。

いかんいかん、と私は首を振り、制服の乱れを直して資料に目を通しました。

そう、何も悪いことばかりではありません。なんと今日は初めての部下が来る日ですから！

もう何度も資料に目を通しました。
ワクワクして気分は高揚、どんな風に接しようか考え中です。
フレンドリー？　それとも厳格に？　やっぱり私らしくひょうひょうとした感じでしょうか？

と、そこまで考えた時にドアを叩く音が聞こえました。

『ハザマ大尉。き、今日からハザマ大尉の指揮下に配属されました、マコト＝ナナヤ少尉です。ご、ご入室しても構いませんか？』

と、それと同時に聞こえてきたのは聞き覚えの無い女性の声。
だいぶ声が上擦いているのは、おそらく緊張しているからでしょう。
……ふむ、ならその緊張を解くのも上司の役目でしょうか。あ、なんか良い響きですね。

ふむ……『入室どうぞ→ガチャ→あれ居ない？→後ろからこんにちは→ひゃう！』完璧ですね。

取り出したるはお決まりのナイフとワイヤー。鋭く強化したナイフにワイヤーをくくりつけて、と。
その後ドアの上に位置する天井付近の壁へ投げる！

「あーはい、構いませんよー」

一言答えてから術式でワイヤーを縮小すれば、あらま部屋には一見だれも居ませんね。

ガチャ「失礼しまー……あれ？」

そしてドアノブを回し入ってくるナナヤ少尉。
ですが当然そこに私の姿は無く、首を傾げていますね。
普通部屋に誰か居たら気配で分かるでしょう。だがしかし、私の諜報員として培った年数は伊達ではありません。
新任ほやほやの少尉に対して見つかるほど、気配の消方は下手じゃないんですよ！

「ハザマ大尉ぃー、何処にいるんですかー？　……おっかしいなぁ、確かにさっき返事したと思ったんだけど……」

くくくく、悩んでますねぇ。
そして私はと言うと、帽子を押さえつつ逆さ向きに成りながら吊る下がっています。なんというスパイダー男。
部屋の中央近くまで足を踏み入れるナナヤ少尉、それを見て私はゆっくり逆さ向きのままワイヤーを伸ばし下降しました。

さあぁーて、どんな反応するでしょうかねぇ！
ゆっくり、ゆっくり、ワイヤーを伸ばして行って……

「……ハッ！　くせ者ォーーっ！！」

飛んできたのは悲鳴でなくて拳。
腹部へと到達したそれによって私はサンドバックのごとく打ち込まれドアへと叩きつけられました。
勿論、その記憶を最後に私の視界はブラックアウトしました。

ーーーーーーーーーーーーーーーーー

「本っっ当に、申し訳ありませんでしたっ！！」

「あーいえほら、確かに危害を加えたのはナナヤ少尉ですけど、脅かそうとしたのは私ですから」

目の前で腰を九十度に曲げて礼をするナナヤ少尉。正直被害は私ですけど原因も私ですから、自業自得なんですけどね。
そして机を挟んで対面するようにして座る私。簡単な術式でも適性があれば骨のヒビ程度なら治せるので、ブラックアウトしてから数分たって気がついてからすぐ治しました。
ドアは直せてませんけど。視界の奥には未だに変な形に凹んだドアが見えます。

と、私の視線に気がついたのでしょう。ナナヤ少尉はふと後ろを向くと、頑張らなければ開けられなくなったドア一つ。あちゃー、と呟き頭を押さえるナナヤ少尉。心中を察するなら新任の薄い給料でドアの修理は痛いのでしょう。

「まあ新任だと色々物入りも有りますから、修理費はいいですよ。あと敬語も」

「ホントですかハザマ大尉！？　いやーよかったぁ、実地訓練とか勿論したんですけど、やっぱ固い敬語だけはくすぐったかったんですよねー」

「え、そっちですか？」

やば、言葉間違えたかもしれません。
一応私が上司とあって半分丁寧語は混ざってますけど、意外というか見かけ通り明朗な人ですね。
しかしまあ今回は仕方ないとして、何回も私がこうしてサポートしてくれると思わせてはいけません。
きちんと対価として何か負担をさせなければ……

ふむ……ではどうしましょう。
相手は女性で許したあとですから体罰なんてナンセンス、それに私のキャラじゃありません。
だとしたらどこかに出かけるのは？
私はぼっちで行けない場所に行きたいと言う願望もありますが、年頃の女性が男と一緒に居て妙な噂を立てられたら大変です。

そうだ、居酒屋はどうでしょう？

私はスーツで行けば仕事帰りの上司と部下にしか見えませんし、なにより私がしたかった事の一つじゃありませんか。

私は多分ニヤリッと口元を歪めていました。と、それを見たナナヤ少尉はビクッと身体を震わせていました。

あーちょっと見すぎましたか。

「そうですねぇ……その変わりと言っては何ですけど、今夜は一晩（酒盛りに）付き合ってくれませんか？」

「え……！！？　えぇっ！？」

え、そこは驚く所なんですか？

遠慮することは有りませんよ。いかがわしい店に行くわけでも無いですから。

まあー人が二人集まって夜にすることなんて、決まってるじゃないですか。

「い、あ、で、でも私は初めてで、そういうのはちょっとその……」

「なんと」

あー成る程、確かに初めてのお酒は怖いですよね。
一応立場上私は上官ですから、悪酔いして迷惑をかけるかもしれないのは、確かにいただけません。
ですが今回は私が誘いましたし、それぐらいで怒るほど私は短気じゃないですから。

「初めてでしたか。なら尚更行くべきですよ。大丈夫です。始めは馴れませんけど後から良くなってきますから」

「うう……」

んーやっぱり遠慮しているんでしょうか？
ドアを壊したりしていますから、これ以上醜態を見せると評価が下がるのではないか、そう考えているに違いありません。
簡単に敬語がくすぐったいと言うような性格ですから、すぐ乗ってくるかと思ったんですが……。
仕方ありません、最終兵器を出しましょう。

「じゃあ……上官命令です。今夜は（酒盛りに）付き合ってください」

ふ……決まりました。
私が大尉になった理由の一つを今達成できましたよ。
上官命令、なんて良い響きでしょうか？いつも命令を書かれた紙切れ一枚でやらされていましたが、この響きは素晴らしい。
これでナナヤ少尉……面倒臭いのでナナヤさんも遠慮は無いでしょ

う。

「あううぅ」ジワッ

ゑ！？

「うぇええん……」

あ、有りのままに今起こっている事を話しますと、ナナヤさんが大きな目にいっぱいの涙を溜めて泣いてしまいました。

真珠のような大きな涙が頬を伝って零れ、床に……ってポエムやってり暇はありません！？

現状把握しますと……

……えええぇぇ！？

え、ど、どうして？どうして？

どうしてこうなったどうしてこうなったどうしてこうなったぁ！！？

そこまで酒盛りが嫌だったんですか！？

いや私は『今夜どーよ』『いいっすね』みたいなノリを期待していたのに、どうしてこうなっちゃったんですか！？

く……短い間の行動を思い浮かべてみても、セクハラに当たること

なんてしてません。
はっ！？まさかまた貴方ですかテルミぃ！？（今回は勘違い）

ガチャ「おいハザマこのドアはなん……」

そして空気を読まない蝶人上司、クローバー大佐が部屋にログインしました。
さて、現状では私の目の前には号泣しているナナヤさん。
そして運悪くドアの方を向いてしまったため、クローバー大佐はナナヤさんのその表情はバッチリ見えているでしょう。
……空気を読んで状況を見てください、別に私が何かしたわけじゃないですよ？

「……フッ……すまんな、日を改めよう」

クローバー大佐がログアウトしました。
ってクローバー大佐ーっ！？　何ですかその合間のフッて！？　勘違いですって！？
ああもうナナヤさんも泣き止んでくださいよ！
ーーーーーーーーーーーーーー

「なーんだ、付き合うってただの酒盛りだったんだぁ」

「なんだと思っ……いえ、まあ確かにそう聞こえなくもなかったですし」

所は変わり、現在私とナナヤさんは居酒屋へと来ています。
どうやらナナヤさんは思春期特有のピンクな妄想をしてしまっていたらしく、誤解を解くことで一日の大半を費やしてしまいましたね。
とはいえ誤解は解けたので、お酒を飲むのは大丈夫だと教えてくれました。

「そうですよ！　もう心は蛇に睨まれたリス！　任官早々失敗してしまった小リスは鬼畜な蛇の上官に弱みを握られ……ああなんと言うことだろう、小リスの身も心も鬼畜な蛇に丸呑みにされてしまうなんて……って、マジな話そんな気分でした」

「これは酷い」

成る程、私の対話を思い出してみれば、確かに上官から命令で『やらないか？』と言われたら怖いですね。

「うう、でも怖かったんですよ！？　任官早々貞操の危機だなんて……頭から尻尾の先まで丸呑みされるかと思いましたよー、うん」

「一種のトラウマですね……あーでも尻尾は確かにいいですね。冬は暖かそうですし」

「！？　ほーうハザマ大尉もお目が高い！　なんとこの尻尾、寝るときは天然の抱きまくらに早変わりするのだ！」

「な、なんと！？」

「勿論毛並みは最高、生きてる私の尻尾ですから保温は完璧！　至高の抱き心地を味わえるのですよ！　どうですかぁ、触りたくなりましたか？」

「く……腕が、勝手に……」

「だが残念！　私のこの尻尾に触れて良いのは私の大親友であるノエるんとツバキだけなのだァー！！」

「なんですって！？　なら私は……私はこの持ち上げた腕を何処に置けばいいんでしょうか！？」

「触りたい？　触りたい？　なら一触り５０００で」

「あ、じゃあ払います」

「えーハザマ大尉セクハラですよ」

「なんでですかっ！？」

あー何と言う馬鹿な会話でしょうか。
ですが私が求めていたのはこのグダグダな空気なのです！
たわいの無い会話で盛り上がる事ができる、それはぼっちの時と蝶

人上司と一緒の時には不可能な事ですから。
大尉になり部下と共にコミュニケーションをとる……現場仕事を全て部下に任せてサボることはできませんでしたが、人生の目標の半分はクリアできましたよ。
ゴール？勿論普通に結婚して普通の家庭を築ければまあ最高ですよね。
まあ、こんな仕事就いといてアレですけど。

「へー、ハザマ大尉もそんな風に笑うんですね」

と、そんな良いこと尽くしの大尉に成れたから、どうやら私は笑っていたようです。

「おかしいですねぇ、始めから笑顔を崩した記憶はあんまり無いのですが」

「でも全然違うよ？　初対面の時は『頭から食ってやんよ小リスちゃんよぅ！ニヤリッ』っていうのだけど、今は『頭から食べさせてもらいますね小リスさん？ニコッ』っていう感じ」

「リスさんの運命がどちらにしても変わっていませんよ！？」

というか前者の笑い方は私じゃなくてテルミさんの方ですから。
そしてお酒も入って少しテンションが上がっているのは確かなようです。

「まあー……こんな仕事ですからねぇ。仲良くお酒を飲める人もいませんから、つい嬉しくて」

私は多分笑っていたでしょう。

諜報員としての仕事は現場も上も殺伐とし過ぎて息が詰まります。テルミさんを理由にして現場だった場所へともう一度戻るのも、ストレスを発散するのが理由ですから。

ふと視線をお酒を入れたコップから前へと移しますと、そこにはポカンとした表情のナナヤさんが居ます。

ふむ、少し辛気臭い話でしたね。

ですがナナヤさんはどんな言葉をかけてくれるのかと思い、

「へー、ハザマさんって友達居ないんですねー」

「ハイ！マコトさん貴女は言ってはいけないことを口にしたあぁぁ！」

予想外でした。

思った以上に『空気？なにそれ美味しいの？』というエアーブレイカーの持ち主だったようです。

「ふふふふふ、でも私には大親友のノエるんとツバキが居る！　勝った！　ぼっちのハザマさんに勝ったよ二人とも！」

「人の地雷をタップダンスするように踏みまくらないでください！」

そしてマコトさんによる更なる地雷の踏破により私のダメージは加速しました。

く……なんで彼女に敬語無しを許したんだ数時間前の私……。

いや、でも寧ろ気を使われる方が私としては辛い。

良しとするしか無いのでしょうか……。

「と、まあー私も親友と呼べるのはその二人ぐらいだしねー。あんまりハザマさんの事言えないかな？」

「へ？　そうなんですか？」

それは意外だと思いました。

マコトさんは明朗な人物ですし、私がこうして話しても面白い人です。

多分教室ではムードメーカーに成りうる人物ではないでしょうか。

学校の事私覚えてませんけど。

「意外……かなぁ？　ほら、私ってこんなナリでしょ？　やっぱり視線とか悪口とか……まあ色々有って」

こんなナリ……まじまじとマコトさんの身体を見ます。
新任であるためスーツ姿のマコトさん。
頬杖をつきながらチビチビとお酒を飲んでいますが、それより先に見えるのは身体を乗り出しているため、テーブルの上に乗る身体の双山。
形が服の上でもはっきりわかるぐらいの大きさで、成る程学生が持てるようなモノではありません。
……つまり、学生にはあまりにも大きすぎるそれは女子生徒の恨みを買い、それが広がってしまった、と。

「ハザマさーん？　それ以上はセクハラになりますけど？」

と、そんなことを考えていると、鋭い視線がこっちに来ていました。

「……あー何と言うか凄いモノをお持ちで……触ってもいいですか？」

「やってみてください。その瞬間、私の弾丸のような拳があなたの顔面を潰す、それでも良いのなら！」

「く……ですが私には顔面など潰しても良い理由（ロマン）がある！」

「……と、冗談はさておいて」

「ですね」

ついお酒が入ったせいで悪乗りしましたが、本当は何となく見当は付きます。

後ろにある大きな尻尾と頭に有る耳、オマケに人より少し大きめの瞳。

普通の人、というには些か語弊があるその特徴を表しているのは、マコトさんが亜人で有ることを示しているようです。

亜人……と、すらすらと説明できたら格好良いのですが、興味が無いのであまり知りません。

精々差別の対象になるんじゃないか、と。その程度は予想できますが。私諜報員ですし。

「だって酷いんだよねー、人のこと指差して獣臭いだなんだって……私の匂いは草原の香りの高級石鹸だっつーの！！」

「成る程……まあ学生ですからよくある悪口ですか」

「だけどそんな私の尻尾をプリティとさえ言ってのけたのが我が親友ノエるん！　そして私になんの隔てもなく接してくれたツバキ、うーんやっぱり二人が居なかったらつまんなかっただろうなー」

「そうですか……それは良い友人を持ったんですね。ちなみになぜその話を私に？」

「ぼっちのハザマさんへの当てつけです！」bグッ

「はははははは、いい加減ににしないと本当に頭からガブリと行き

ますよ小リスさん？」

私としては友人の自慢をされて胸やけしそうなのですが。

「ふ…殆どは冗談ですから！　それにもうハザマさんはぼっちじゃないから大丈夫！」

ですよね。
私がぼっちなのは変わらない事実であることは確かですけど。
というかお酒のせいで妙なテンションになっているので仕方ない。
顔にうっすらと朱を注しているのですから、そこそこ出来上がっているようです。

ん？　だけど現在進行形でぼっちの私ですがぼっちじゃない？

「と、言うワケで、仕事オフの時に限りこの私、マコト＝ナナヤがハザマさんの一番目の友達になりましょう！！」

「……へ？」

ああ確かにこの時の私は呆けた顔をしていたのでしょう。

そんな様子の私に、むっと目を据えるマコトさん。
視線だけで『何か問題ありますか？』という声が聞こえてきそうです。

私はといえば、ただ驚いていました。
友人、友達、フレンド。聞きなれない言葉であってついどう言えば良いのか分らなくなっていたのでしょう。

「えーとですねぇ……あーえー、よ、宜しくお願いします？」

だから疑問系になりながらもそう答えました。

マコトさんはそれを聞いてニカッと笑みを浮かべると、チビチビと飲んでいたお酒を一気に呑みました。

「それなら今からは無礼講です！　よーしママ名酒獣五朗とおつまみ頼んじゃうぞ！」

「やめて！　おつまみは良いですけど給料が吹き飛ぶようなお酒を頼まないでくださ……って早っ！？」

先程のしんみりした状況はあっという間に吹き飛び、再度馬鹿な空間が辺りに蔓延しだしました。

名酒をいっき飲みさせられたり、マコトさんの友人の話しで盛り上がったりと、普段私が感じないような感情が立ち込めて来たような気がします。

そうだ。これが楽しい、ですね。

外へ出ての気晴らしとはまた違ったベクトルの楽しさ。
それが今この空間に有ることが本当に嬉しいと、これまたリアルに感じる感情が溢れています。

……それで余談とするなら、完全に二人とも酔い潰れてしまい、店のテーブルから顔を上げた時には小鳥のさえずりが聞こえる時刻になっていたことでしょう。

ーーーーーーーーーーーーーーーーーーーー

思うなら、この日の出会いこそが『ハザマ』という存在が観測され、

世界の一部へと変貌した日だったのかもしれません。

だからこそ私／俺は俺／私ではなく私／俺自身である。

そう、私は考えます。

すてーじ5（前書き）

この小説の傾向はシリアスです。

すてーじ5

こんにちは、統制以下略のハザマです。
マコトさんを部下へと迎えてから早一ヶ月、聞き込みや書類整理などノンアクティブな仕事を片付けていました。
お蔭様でテルミさんが出てくることも有りませんし、たまに友人としてマコトさんと酒盛りに。最近私も充実してきたと言えるでしょう。リア充、素晴らしい言葉ですね。
今のところ危険も無く落ち着いた状態である、と言えます。

さて、今回の私の現場へ戻っての確認、というか旅行はイカルガ篭城戦が行われていた都市です。
……に行こうと思っていたのですが、戦争跡地とあってごたついてるらしいので、その人民が流された第十三階層都市カグツチへとやって来ました！

ふふん、と浮かれ気分で鼻唄を歌いながら、私はのんびりと町を歩いています。
理由は二つ、一つ目は秋のこの時期ですとイカルガの文化ではお祭りをするのです。
勿論、今日はその祭の日で私の視界にはあちらこちらでお店が、屋台が立てられているのが目に入ります。
別に狙って来た訳ではありませんけど、タイミングが良いと言うのはこのことを言うのでしょう。

そして二つ目は……

「おーいハザマさーん。はーやーくー」

「ん？……あ、ええ、今行きますよ」

と、自分より少し先から聞こえる黄色い声に私はぼんやりとした空想から抜け出し、歩幅を上げて近づきました。
その視線の奥にはイカルガ風の服を、所謂ユカタと呼ばれる着物を着たマコトさんが入っています。
オレンジ色の布の上に赤い花のような刺繍がされたその着物を、ミニスカートのように着こなす姿は、やはり活発である彼女のイメージにピッタリで少し乾いた笑が漏れましたね。

数時間前、私が任務（苦笑）と言う名前の旅行に行こうとした時、非番だったマコトさんが任務に連れていって欲しいと頼みました。
カグツチへ流れた人たちの動向を探ってほしいといと、任務を言い渡されたのですが、正直遊びながら探ろうと思っていたんですよね。
ですが……スーツをビシッ、バシッと着込んだマコト少尉がそこに。

と、勿論任務だと考えていたでしょうマコトさん。ですが対するはその辺の観光をするだけの私。実際任務とか殆ど気にしないで観光ムードでしたし。
私の任務（と言う名前の休日）に気が付いた瞬間、『こんなもん着てられっかー！』と言う叫び声と共に服屋さんに駆け込んだマコトさんは、数分たってユカタ姿で戻ってきましたね。

あ、でも寒くないんでしょうか？

「分ってないねハザマさん！　祭りとは戦場、一瞬の油断さえも許されぬその時間においてぼんやり過ごすなど愚の骨頂！」

「戦場……成る程、確かにそならはぼんやりしてる暇はありませんね」

マコトさんの突き出してきた拳の間にあるのは、フランクフルトとホットドックに林檎飴、もう片方の腕にはビニール袋の中にタコ焼きイカ焼きお好み焼きが積まれています。
遠慮とかどこかにすっ飛んだのでしょう？　私ヒモにされてませんよね？　まあお金の使い道なんてナイフやシルバーアクセサリを買うぐらいしかありませんけど。

「というか……まぁ奢るのはやぶさかではありませんし、食べるのも良いですけど……太りますよ？　」

女性はほら、カロリーとか色々気にするものだと思うのですが。
屋台の商品は沢山食べれますがカロリーも多い。少しは気にしなければどんどん脂肪が…

「ふ…だから分かってないと言うのだハザマさん！　カロリーが恐くて祭が楽しめるかーっ！？」

そう言いフランクフルトを三口で食べると、指に残った串をゴミ箱に投げ入れました。
そしてかぶりつくのはホットドック……は私が視線を手に向ける前にいつの間にか消え失せていますね。残ったのは串だけです。

なんというか、容姿は女性なのに着物の裾が少ないから太もも大きく露出してたり、食べ方なんかが清々しいほど漢らしいんですけど。

悲しい事にマコトさん以外の女性の知人は居ませんが、マコトさんはずいぶんダイナミックであることは想像出来ます。

無防備に顔にケチャップつけたりと、少しはしゃぎ過ぎじゃないでしょうか？

「ほらマコトさん。流石に女性がそんなにはしたなくしちゃだめでしょう？　ほら、頬にもケチャップがついていますし」

「へ？　どの辺？」

「右上の……ああもう、取りますから少し動かないで下さい」

「ふひまへん」

「そう言う側から苺飴を頬に含まない。リスですか貴方は……って、リスでしたね」

とりあえず顔をこちらに向かせウエットティッシュで顔を拭き取りました。

それにしてもマコトさんの頬って柔らかいんですね。

リスの亜人ですから頬袋の遺伝の名残でしょうか。

おもむろに摘んで引っ張ってみました。

むにむにむにむに

伸びますね。柔らかめのグミのようです。

むにむにむにむに

「ハザマさーん？　そろそろやめないと5秒後に私の私の拳が鳩尾に飛ぶけど。いーち」

なら後4秒は大丈夫ですね。

ああ、いい触感です。

むにむにむにむに

「にさんよんごぞぉい！！」

「ぎょえへっ！？」

ーーーーーーーーーーーーーーーー

「良かったですねマコトさん。ここが本部でしたら一発で独房行きでしたよ？」

「良かったねハザマさん。私がセクハラで訴えていたら一発で牢屋行きだよ？」

「申し訳ありませんでした」

日も暮れて空が暗くなった頃、お腹は空だったのが幸して危うく中身がリバースするところを、大きな惨状にはなりませんでした。

それにしてもちょっと悪乗りしましたね。

少し前にもホワイトチョコバナナを食べているときに『……すばらしいですね』と意味ありげに言ったらハイキック喰らいました。少し自重しなければ。

欲情もしてたんでしょうか。質が悪い。

初めての友人とあって無知な所もありますが、少々踏み込み過ぎたようです。反省。

「まったく、これが私じゃなかったらとんでもない事になってたね、うん」

「鳩尾にえぐるようなブロー以上ですか…」

「勿論！　例えばノエるんだったら大号泣。乙女の涙を流させた罪でハザマさんは牢屋行き。ツバキだったら……あーご愁傷様」

「どれだけツバキさん凄いんですか！？」

……いえ確か聞いた話しだとツバキさんの名字はヤヨイ、が頭に付きます。

ヤヨイ家、帝を守る十二宗家の本締めの家。権力とか物凄いですよ。上流貴族のものすごく上の方の方々だと考えていただければわかりやすいですね。

で、かくいう私は……家名がないので貴族ですらありません。ただの一般諜報員の首とかあっという間に飛びますね。
おかしいな、私大尉になれるほどのエリートですよね？　待遇はアレですけど。

ですがヤヨイ、ですか。

……諜報員としては収集のために充分利用できる名前です。
ネームバリューは他人が持つ分にはいくらでも利用できますから。

チラッとマコトさんへと視線を向けました。
が、相変わらず頬にいっぱい食べ物の含ませていました。
なんというか、シリアスな思考に切替ようとした所を撃ち落とされた気分です。

とそうして見ている内に視線に気が付いたのか、マコトさんと視線が重なりました。
最後のパックのタコ焼き、それを食べようとして口に運ぶ最中、身体が硬直しています。

「……」

「……」

「……あげないよ？」

「いりません」

見ているだけで胸やけします。
思わず大きくため息が漏れました。少なくとも休暇中に考える必要はありません、後で考えればいいのです。何と言うダメ人間思考。

「んー、おいしかった」

ぱく、と私がどうでもいい思考をしている最中、いつの間にか最後の一つになったタコ焼きをほお張り満足そうなマコトさん。
見ているこちらも微笑ましくなります。

「マコトさんでも流石にもう満腹ですか」

「まだ八分目ぐらいだからそうでもないケド。でもハザマさんの帰り賃が無くなっちゃうし」

まだ食べれたんですか貴女は。
奢りなんて言葉、簡単に使うべきじゃないですね。財布に冬が訪れました。

やれやれと軽く息をつきつつ帽子を直すと、私の視界に既に暗くなった空が入りました。
もう夜の八時も回った程でしょうか。流石にもう本部へと帰った方が良いかもしれません。

「あっと、そうだハザマさん！」

「は、はい」

財布の中身を確認しようとした私に、マコトさんは腰に手を当て、急にずいっと顔を私に近づけました。
急に近づかれた事と覗き込まれた事にびっくりしたためか、私は一歩後ずさりましたけど、マコトさんは尻尾をゆらゆらさせながらこちらを見てきています。
それはどこかふて腐れているというか、怒っているというか、何とも言えない表情です。

「休日中、急に諜報員の雰囲気を出されると困るよ。びっくりするじゃん」

と、そこにかけられた言葉に私は返答することができませんでした。

「……なぜそうお思いに？」

「なんとなく？　なんか雰囲気が微妙に変わったからそうかなって。

今みたいにさ」

なんとなく、つまりは勘ですか。
諜報員に関わらず衛士なら生き残るために勘、危機察知能力は重要にまります。
諜報という任務には罠の仕掛けて有る場所へと踏み入れることも暫しあり、勘の良し悪しは以外に役に立つものです。
マコトさんのは野性の勘というやつですね。亜人という半分野性の血が入っている事は、戦士としてはメリットであるのでしょう。
だからこそ惜しい、これで友人を利用できる程の冷酷さが有れば、その戦闘技能と合わさり諜報員としては一流になれるでしょうから。
どっちもできない私は三流ですが。

「残念ですね。その勘も、人脈も、利用できたのなら諜報員としては大成したでしょう」
「……それは私にツバキを利用しろって言いたいのですか？　ハザマさん、いくら私でも怒りますよ」
「失礼、失言でした」
私はそう言葉を続け、身構えるマコトさんへと小さく笑いかけました。
その言葉には悪意を含めたわけではないのですが、やはり聞き方によっては失礼に当たりますね。

すみませんでした、とひとつ頭を下げた私を見て、マコトさんは小さくため息をつきました。

「……うん。ツバキは士官学校で私を『マコト・ナナヤ』と見てくれた。なのに私がツバキを『ヤヨイ』として見るなんて、そんな裏切るようなことはできないよ」

はっきりと私に答えたマコトさんにやはり私の口から苦笑が漏れました。

やはり、彼女は諜報員には向いていない。

諜報員はその大切な友人にさえも、裏から探らなければならないこともあります。

一枚岩ではいかないのが組織であり、軍というあり方でもあるのですから。情は確かに戦いに於いて大きな力を発揮するものですが、任務、それも諜報という活動では邪魔になるものです。

「ええ、マコトさんはそのままである方が好ましいですよ」

でも私はなぜかその邪魔になるものをマコトさんには持ってほしいと思いました。

おかしいですね。私の部下である人に心構えをしっかり教えた方が、私の生存率は上がるというのに。

その発言はよほど可笑しかったのでしょう、マコトさんはぽかんと

口をあけてこちらを驚いたように見てきていました。

「……って、マコトさん？」

「あっと、すみませんハザマさん。なんか……ちょっと意外だったので。情報の網を作り出すのに誰かを利用するってことは、士官学校時代もさんざん言われてたことだったから」

うわぁまたなんか間違ったこと言っちゃったんですかうわぁ。
く……記憶喪失で私に士官学校時代の記憶が無いなんて言ったらどうなるでしょう。
『えっ……そうだったんだ。ごめんハザマさん…』みたいな空気になってしまうではないですか！（ただの被害妄想）
相手に気を使わせるという行為も面白いものじゃありませんよね。
回避してみせます。

そこで私は苦笑してから空気を軽くするために一息つき、体の力を弛緩させました。
ようするに発言についてごまかそうと思ったのですね。

とりあえず辺りをぐるりと見回し、話のネタになりそうなものを探します。
……ない。さすがにもう屋台の食べ物ネタは尽きています。財布の中身も尽きてますよ。

なにか、なにかないでしょうk『皆の衆、今日二十時より打ち上げ花火の始まりでござる！　楽しみに待つでござるよ！』

こ・れ・だ！

「は！？　任務ですマコトさん！」

「へ？　あ、えっと？」

「イカルガの残党が花火に見せかけた爆弾を使ってテロを企てているかもしれません！　さあ早く見やすいスポットに移動しますよ！」

「ちょ、ちょっとハザマさんってば！」

素晴らしいタイミングでの花火通知でした。
とりあえずその場から駆け足気味で離脱すると、マコトさんが追いかけてきたのがわかります。
ふ、いったん場が壊れたことによってもう一度口をきく時は空気が弛緩しています！
何が好きで休日まで真面目にしなきゃならないんですか。最初に思考を持ってかれたのは私ですけど。

しかしマコトさんに言ったようにあまり諜報員としてそれだけになって欲しくないのは本心なんですよね。

どこまではしてもいい、だけどその先はしてはいけないという線引きは重要なものですから。

まあとりあえず……花火を見てからいろいろ考えます。疲れたので。

私は足を少し早めると、綺麗に見えるだろう広場へと進みました。

『言うじゃねえか。お前に線引(そんなもん)きは存在しないってのに』

ーーーーーーーーーーーーーーーーーーーー

私の上司は、ぶっちゃけ変な人だった。

初対面で驚かせようとしてぶっとんだり、（これは私が悪いけど）セクハラまがいなことをしたり、気安いというか上司っぽくなかった。親しみやすいというのは確かなんだけどね。

それになんだか距離感がつかめない。近かったり遠かったりさまざまで、話してて飽きない。

仕事に関しても、諜報部ってもっと殺伐としたところだと思ってた分、予想以上にフレンドリーだった。たぶんハザマさんの性格のせいでもあるけれど。

木の上から自分の上司を見下ろす。やっぱり登るのは躊躇してるみたいだった。

「ハザマさんこっちだってば！　ハリー！ハリー！ハリー！ハリー！」

「いや確かに見晴らしは良いかもしれませんけど、木をスーツで登るのは無謀ですって！」

「大丈夫、私は一向に構わん！」

「構ってくださいよ！」

あと数分で花火は始まるのにハザマさんは登ってこない。

仕方ないから肩で担いで一気に跳躍したけど、なんだか、ひょえっ！？、とか言って驚いてた。ちょっと面白いかも。

「確かに此処なら視界も悪くはありませんね。なぜこの場所を？」

片手に持ったビニール袋を置き、その中からお酒入り缶を取り出しつつハザマさんは聞いてくる。
私も缶のプルタブを開けつつ答えた。

「その辺に忍者の人がいっぱい居るよね、その人達から聞いたんだけど……ハザマさん？」

忍者、という単語になぜか硬直したハザマさん。
『忍者……釘…落とし穴…』とぶつぶつ言い始めたのを見て、やっぱり変な人だと再確認する。

そうこう言っている間にも、二十時に時計の針は差し掛かっているのに、いまだに何かをぶつぶつ言ってるハザマさんには正直笑わせてもらった。
私が話しかけないとそのままだったかもしれない。

『皆の衆、準備は良いでござるかっ！？　拙者は準備万端のバリバリでござる！　今、この時より復興祭最後の打ち上げ花火の始まりでござるよ〜〜！！』

とそう思ったけれど、やっぱむさ苦しいこの声に結局は気が付いていたと思う。拡音の術式を使わないでこの声は正直すごいよね。

それと同時に気が抜けるような音と共に花火が発射された。
最初の花火は赤色。大きく空に咲いた光の花は花火という文化を教えてくれた親友の姿を思い出させた。

（ん～ツバキは元気でやってるのかな？）

ちょっとした連絡を取ることはあっても、どの場所に任官したかは分からなかったから、心配なところもあった。
けどどちらかというと自分よりもそつなくこなせるツバキなら、すぐに舞台の人となじめると思う。
次の花火は黄色と青。連続で打ち出されていくそれはおっちょこちょいの親友の姿が思い浮かぶ。

（ノエるんは……キサラギ先輩と上手くいけてるのかなぁ？）

ノエるんは卒業間際でキサラギ少佐の秘書官として引き抜かれた。
なんでノエるんが引き抜かれたかは分からない。知り合いという線だったらツバキの方が邪険にならないんだけどなぁ。
案外調査が甘かったのかもしれない。
そして今度は青から緑へと花火はかわっていった。

（私は……それなりかな。上司の人も結構面白いし）

思い浮かんだのは隣で花火を見るハザマさんだった。
ぽかんと空を見上げるさまは、ショーウインドから離れない子供の

ようにも見えて、思わず口元が緩んだ。

「凄いですねぇ。あれってどんな術式を使っているんでしょうか？」

「あはははは……、べつにあれは術式を使ってるわけじゃないよ。たしか一つ一つ手作りで作ってるんだって」

「えぇ！？　一発ずつ全部をですか！？」

「そそ、一つの玉の中にたくさん光る玉を入れて、それをどーん！って打ち出す……ってツバキが言ってた」

「はーなるほど……それにしてもこれが……綺麗、綺麗ということですか……いや……」

私の説明に何度もうなづくハザマさんは、やっぱり視線だけは花火に釘付けだった。

新しいおもちゃに目を輝かす子供みたいにみえてやっぱり可笑しい。

思ってみればハザマさんには年齢よりも幼い印象を持った。

たしか年齢は二十代後半だと聞いたけれど、自分と波長が合うあたり、やっぱり子供っぽいのかもしれない。私も子供っぽいところが少しあるから。

警戒したのも短い期間であって、最近は友人として過ごすことも少なくない。男性の知り合いとしては紳士的な部類にも入って心象はすごぶる良かった。

だから、信じられないこともある。

空に上がったのは深い緑色の花火。
その時に視線を横にずらしてハザマさんの表情を覗った。
そうだ、やはり優しそうな表情はそのままで、私の中の印象と一致する。

なら時折見せる、蛇のような雰囲気はなんだったのだろう。

初めて見たとき、本能が感じた。目の前の人物は『蛇』だと。
それこそ油断したら頭から丸のみにされてしまうような、そんな危険な雰囲気を。

自分の勘はよく当たる。本能的な部分のものは亜人である自分はよく感じ取れた。

それがハザマさんの本質なら、私の隣で花火を見るハザマさんは偽物なのか。

でもそれに私は否だと答えたい。

最後の花火が打ち終わり、静かな星宿が辺りに流れる。

「さて、と。じゃあ帰りましょうか。明日も任務ですし」

「……もー、お祭り中に仕事の話をしないでってばー。お祭りは帰るまでがお祭りなのだ！」

「あらら、それは失礼しました」

広げたおつまみや缶を片付けビニール袋にまとめるハザマさん。

それはどこにでもいるような男性にしか見えない。

「じゃ、帰りましょうか」

さっと木から飛び降りるハザマさんを追って私も飛び降りた。

空港までの道を談笑しながら思う。

この胸騒ぎは違和感に違いない、と。

私はそう思った。

すてーじ5（後書き）

胸騒ぎ、と書いてもハザマさんだと恋愛フラグにはならない。不思議。

すてーじ6（前書き）

ＣＳ？やったけど、第七機関一の萌キャラはアラクネだった。

すてーじ6

第十三素体の運搬は完了、あとはラグナ＝ザ＝ブラッドエッジが来るのを待つだけ、ねぇ。

またこの結果か、つまんねえの。

ノエル・ヴァーミリオンの生存確率は上がったが、あの人形が蒼に目覚めるわけもない。……まあ出来が悪いと言っていた素体に期待するのは馬鹿らしい。

荒々しい足取りで自分の執務室へと向かう。
軍用の携帯食料はとても食えたものじゃないが、腹に溜まった以上、何か追加で食いたくはない。

おそらく昼の休憩が終わったのだろう、統制機構本部の中で、移動する足音も多い。どいつもこいつも腹一杯で幸せそうな顔をしていて、思わず吐き気がした。

「……チッ、クソが。だが今の俺にできる事が無ぇ」

元々あった力の残りカス程度しかない現状、やれる事は舞台作りをするだけだ。
だが……気に食わねぇ。『タカマガハラ』の連中の犬のようになって、わんわん吠えるだけってのは。
らしくない。

『滅びの日』を進める、これに対して意義も何も無い、大賛成をくれてやる。
だが観測されていない以上、こうした頼代が無ければ、世界に自分を確立させることさえできない。
面倒だ、と一人ごちる。いつになるか分からない可能性を探すのか……いや、

一応居る。観測者に比べれば月と肥溜に群れる蝿以上の差が有るが、と自分という存在を確立させられる者／物が。

「あ、……大尉！」

廊下を歩いている最中、自分に向けられる気軽い声が聞こえた。
それはスーツをきっちりと着込んだマコトだった。そこには何時もの明るい笑みは無く、片手には書類が持たれていた。

「……おやマコト少尉、もう昼ですが、おはようございます。どうかしたのですか？」

「……ハッ、大尉に依頼されていました、書類の整理が完了しましたので、報告に参りました」

真剣な表情の彼女に対し考えた事は、面倒だ、の一言だった。
俺が自分の事に対して何をしようが、どうでも良かった。ただ獣臭い目の前のゴミが居ることが気に食わないだけだ。
最初、自分に対する態度としては妙だと考えたが、仕事のオンオフの切替と考えれば疑問も片付く。ついでに言うなら、舞台に上がることすら無かった獣一匹、正体を知られたところでなんの問題も有りはしない

「分かりました、とはいえ私は今少し忙しい身です。少し経ったら執務室へ運んでください」

「……ハッ、了解しました！」

素直に引き下がるマコトに内心で評価を少し上げた。
こういう命令をしっかり聞いてくれる存在が、一番面倒でなくていい。

向かう先は執務室。それで俺がやることはもう殆ど無ぇ。

――――――――――――――――――――――――――――

こんにちは、今日はなぜか執務室で目を覚ましたハザマです。

あーなんでしょうこの朝目覚めたばかりの怠慢感は。
書類を書いている最中に寝てしまったというわけではありません。
ですが数センチの束になった書類の束が増えているあたり、おそらくテルミさんと入れ替わっていたのでしょう。
最近はあまりなかったのですこし驚きましたが、まだ時刻は昼を少し過ぎたぐらい。しっかり食事の楽しみもとられ満腹感があり、選択肢は書類仕事の一択になったあたり作為を覚えます。というか書類仕事してくださいよテルミさん。

とりあえず私は書類の束を読み始めました。

……ふむふむ。どうやら午前中にテルミさんは仕事を済ませていたようです。
なんでも『素体』という代物を諜報部でカグツチまで届けるだけの簡単な仕事だったそうですね。

次の書類は……あらら、諜報任務の命令書でしたか。

内容はとある違法研究所の調査をしてこいと、ようするにちょっと目につく研究所があるから様子見してこいってことですね。
この程度の仕事ならわざわざ私が行く必要もありません。少尉にも普通に任される仕事ですし、私が直接現場に行く必要もありません。
……そういえば上官つけろって命令来てました。だから上官は私しかいませんってば。舌打ちしたくなりますね。
緊急の、というわけではありませんが、さっさと行ってさっさと誰かに中継させましょう。私は書類仕事をしたいんです。旅行以外で現場に行きたくありません。

「出発は明日、準備はさっさと済ませておけってことですね」

たしかマコトさんは書類仕事を任せていましたし、今日はたぶん出会うこともなかったでしょう。
そんな大量の書類でもありませんから、今日中に終わると思われ…

『失礼しますハザマ大尉。書類の作成が終わりましたので報告に参りました。ご入室しても構いませんか？』

と、よいタイミングで来たようですね。

「ええ、構いませんよ」

「では、失礼します」

相変わらずオンとオフの切り替えが凄いですね、と私はきびきびと動くマコトさんに尊敬の念を送りました。

「……ハザマ大尉、ですよね？」

「？　そうですけど、どうかしました？」

「いえ、なんでもありません。これが今回の報告書です」

「ご苦労様ですマコト少尉。あー次の任務が入ってきてるので、そ

このソファーにでも座りながら確認してください」

少しマコトさんがよりいっそう真面目な顔つきをしていたので、思わず首をかしげました。

とはいえ仕事中でもあり、私は机の上にあった書類の束の一部を渡し、報告書へと目を通し始めました。

前回の任務（旅行）での報告は、私としては異常なしの一言で送りたいのですが、それができないのが仕事人というものです。

正直面倒だったのでマコトさんへと丸投げしたのですが、快く承諾してくれました。すばらしいですね部下って。

ただ罪悪感も半分あります。やはり自分で出したほうが心臓に有情ですし。

辺りには書類をめくる音だけが響きわたりました。

私もマコトさんも仕事であるときは真面目なんです。たぶん。

一通り見終わったところで私は軽く息を吐き、手元にあるコーヒーを一口飲みました。

なぜか紅茶を飲もうとすると拒絶反応が起こるんですよね。テルミさんが嫌いなんでしょうか？

さておき誤字訂正する場所もなく、私はパサリと書類を机に置いて書類を読んでいるであろうマコトさんへと目を向けました。

「読み終わりました？」

「はい。翌日１８００時現場到着、各自偵察行動を行い研究所の見取り図を参考に、証拠、研究資料等を奪取後に各自の判断で撤退。

２２００時に合流後帰還。……相違はありませんか？」

「パーフェクトです。準備もありますから今日の仕事はおしまいです。肩の力を抜いてもいいですよ」

「わかりました。では失礼して……あーつっかれたぁ。書類仕事なんてだいっ嫌いだぁ～」

と、仕事ではなくなったとたんにだれるマコトさん。
ソファーに申し訳ないように浅く腰掛けながら書類を読んでいたのもつかの間、両手を広げ深く真ん中に寄りかかり、おもいっきりくつろいでいます。

いや、まあ、確かにオンオフの切り替えがすごいとは思いましたけど。人が来られたら大変ですよね。クローバー大佐ぐらいしかここ来ませんけど。任務の伝達全部メールですし。
まあ友人らしく接してくれるのは楽でいいですけどね。

「いえいえ現場の方が面倒くさくないですか？　危険ですし疲れますし」

「だってー、体を動かす疲れはまだ健康的だけど、書類の疲れは悪い疲れだから嫌い。……というより頭を使いたくないじゃん？」

「ぶっちゃけましたねー、諜報部大尉の目の前で」

「いや、ハザマさんの目の前でしょ？」

なるほど、今はオフですからこれは一本取られました。しかし諜報活動とは基本的に頭を使うものです。
調査し、資料をまとめ、情報を作り出す。正直頭を使ってばかりの仕事ですよ。
まあ多分何年か仕事を重ねれば慣れることですから、急いで教えることもありません。

「うれしいことを言ってくれますね。とはいえメリハリは大切ですから。おっとそうでした、お茶でも飲みますか？」

「あ、じゃあ私煎れて来るよ。食器借りるね」

「そうですか、ではお願いします」

緑茶と呼ばれるそれは前の旅行…じゃなくて任務でお土産で買ってきたものです。
小さなユノミというカップに緑のお茶はとても綺麗に映えるものでした。

「んじゃ、どーぞハザマさん」

「ありがとうございます」

とは言え、そればかりに視線を送るわけにも行きません。
少し視線を逸らせば書類の束がまだ残っているのですから。今日中

に明日の現場での準備を終わらせなければならないので、少し急ぐ必要があります。

とりあえずユノミを脇に置いた私は、書き込む事が中心の書類を片付け始めました。

――――――――――――――――――――――――

「あー支援物資これだけですか……相変わらず諜報員を鉄砲弾と勘違いしてるんですか…もう」

書類読んで頭を悩ませるハザマさんを、私はソファーに座ってお茶を飲みながら横目で見ていた。
やれやれといった様子でため息を吐き、端末を弄りながら時折お茶を飲む……言うならいつもよく見ているハザマさんの姿だった。
それはまるで仕事に忙殺される中間管理職の姿。とてもじゃないけど頭の中で導きだされた姿に当てはまらない。

いや、目の前に居るのはハザマさんだ。だったらさっきの『ハザマさんに似た人物』は？

気配が違う。多分よくハザマさんと共に居る私だからかもしれない、その微妙な、されど大きすぎる違和感に気がついたのは。

あれば『やばい』

とてつもなく大きな事が起こるような、そう直感が告げていた。

書類に眼を下ろす。

諜報、潜入任務。何時もの任務。自分が大きな事件に巻き込まれている様子も無い。

だから、ハザマさん聞くのは危険かもしれない。

だけど、

「ハザマさん」

私は声をかける。

「せめて危険手当の増額を……ん？　どうかしましたかマコトさん？」

ハザマさんはやはり、何時ものように応答する。

「その、聞きたい事があるんですけど……」

「聞きたいこと、ですか？」

きょとんと首を傾げるハザマに、私は言葉を続けた。

「はい……ハザマさんは何者ですか？」

その率直な問いかけをした瞬間、微笑みを浮かべていたハザマさんの表情が固まった。

「私が何者、ですか」

ゆっくりと確かめるように呟きハザマさんは暫し思考していた。

ひょっとしたら、本当に聞いてはまずい事だったのかもしれない。

眼をつぶり黙っていたハザマさんは、ゆっくりといつも浮かべていた細目の笑みを浮かべず、真剣な表情だった。

「何者、と言われましても、私も上手く説明することはできませんね。それは聞かなければならない事ですか？」

「……はい」

「ん～諜報部としては自分で調べて欲しいところですが……まあいいでしょう。私、ハザマと言う名前ですが、苗字は有りません。正しく言うなら知らないのです」

知らない？

首を傾げる私に、補足するように話しを続けた。

「私は衛士になる以前、正確には今から七年半より以前の記憶が無いのです。勿論、諜報活動の合間に自身の事を調べましたが、統制機構諜報部のハザマ、ということ以外は調べられませんでしたから」

姓が無い理由をあっさりと言った事に私は驚いた。
別に貴族では無いからといって、姓も無いなんてことは無い。だけど姓は自分の家族をつなぐ物でもある。
だから、ハザマさんに家族が居ない、そして自身を繋ぐことのできる存在が居ない、という事が分かってしまい、私は口の中が苦く感じた。
それは口にさせてしまってはいけないものだったのに。

「できれば、そんな表情はしてくれないと嬉しいですね。一応、あんまりこの空気が好きじゃないから言わなかったことですから」

「……あ、その……すみません」

「いえいえ、こちらこそ気を使わせてすみません。
とは言え、私が話せるのはそれくらいです。貴女の目の前に居るのは統制機構諜報部大尉のハザマ、それ以上の事は必要ですか？」

「……いえ、大丈夫です」

「なら安心ですね。明日は出発まで時間がだいぶありますけど、準備だけはしっかりしてください」

ハザマさんはそう言って再度書類を相手に仕事を開始していた。
私はただ、座ったまま書類に目を落とす。内容は何も入ってこない、気落ちした気分はなんとなくその場所の空気をも重くしたような気がした。

そこで話は途絶え、私は書類をハザマさんに帰した後、すぐにその部屋から離れるように立ち去った。
聞いてはいけないことを聞いてしまったことの罪悪感もあった。

だから、肝心なことを聞くことができなかった。

この先、私はハザマさんの隣ではなく、反対側に立って対峙しなきゃならなくなる。

もしこの時に聞くことができたなら、運命はどんなふうに動いてい

たのだろう。

それは私にも、ハザマさんにも、ひょっとしたら神様にも分かんないことかもしれなかった。

すてーじ6（後書き）

そろそろ”えいゆうさん”はＣＴ後の状態で幻想郷とかハルケギニアとかに召喚される小説があってもいいと思った。、”えいゆうさん”から”英雄さん”への空白期もあって、魔素不足、アークエナミー封印状態＆自暴自棄状態の弱体化フラグ。アークエナミー解放＆抗体覚醒の強化フラグ。ユニット装着”英雄さん”になる最強化フラグ。これだけ山場を作りやすい要素が揃った主人公も珍しいと思う。

すてーじ7（前書き）

話は進んでません。この小説はシリアスです。

すてーじ7

今晩は。色々略のハザマです。
今日私は任務があります。勿論街の噂を調整するとかそういう任務ではなく、施設に侵入する偵察任務です。
ちょっと違法研究やってるから、証拠見つけてきてねーっと、そんな内容でした。
明らかに衛士に突入させて強制捜査した方が楽でしょう。上の方々は現場を知らないから困ります。
抗議文でも送りつけようかと思っていました私でしたが、自身で調べてみると、どうやらその研究所にはお偉いさんの致命的な失態の証拠があるとのこと。
そこで諜報部の出番です。秘密裏にその資料を回収して処分してこいと、そういう理由が裏に有りました。自分の失態は自分で何とかしてほしいところですけど……これだから使い走りは泣けてきます。
それにそういう仕事（処理）は第零師団辺りに任せたいんですが……。
しかし、マコトさんにはただの諜報潜入任務だと伝えてあります。できればそういった裏については知らないで欲しいですね。
……さて、あまり気乗りはしませんけど、任務ならばそれに対して全力を尽くすべきなのです……が、

「ハザマ大尉、間もなく到着します。準備をお願いします」
「あ、ありがとうございます。あーっと、ナナヤ少尉？」
「……？　どうかしましたかハザマ大尉？」

「あ……いえ、なんでもありません」

いつものやり取りに見えますが、今回のそれは違っています。
そう、何が違うかと言いますと、マコトさんの表情が……とくに浮かべるものも無く、無表情なんです。

さて、この状況が私の今の悩みとなっていますね。

今日はマコトさんに出会った瞬間から、任務への心構えができているかのように、言葉も最小限でわかりやすい言動で応えてくれます。
仕事モードの中でもマジが付きそうなほど真剣…なんでしょうか？
　真意は定かではありませんでした。
無表情を読み取れというのは、諜報員大尉の私にとっても難しいんですよ。それが同じ諜報部となるともう……隠すことも仮面の重ね付けをしているぐらい表情が分かりません。マコトさんも最近習得してきたみたいなんです。

なんでしょうかこのギスギスした空間？
ちょっとー、引き継ぎの諜報員さーん？　空気を読んで帰ってきてくださーい？　間が持たないんですよ。

いつもなら任務だったとしても緊張ほぐしで、軽口ぐらいは叩くのですが、今回の会話の少なさと言ったらもう、過去最高と言えるでしょう。
なにが原因？　私の記憶ないんです宣言にきまってるじゃないですか。絶対気を使わせてしまいましたよね、ええ。だから言いたくなかったんです。

そうですか、と一言言って外を見続けるマコトさん。
そこで終了する会話。
重くなる空気。思わず私は呻いてしまいました。会話ができて、更に会話のネタがあるというのに話せないのは久方ぶり、というか初めての出来事のため、どうすれば良いか考え物なのです。

視線を移すとそこには外を見てたたずむマコトさんの姿……と、心なしか落ち込んでいるように見える尻尾があります。
ゆらゆらと揺れるそれですが、いつもよりも振れ幅が小さく、古時計のように左右に振れていました。

「……尻尾」

それは、まるで魅了の魔法のように見えます。
同じ空間に居るなら、いつも話しているはずなのに話せないその状態は、私に余程のストレスを与えていたのでしょう。一種の欠乏症でしょうか？
いつもマコトさん自身がふもふされてる尻尾に、なぜか今の私には猫じゃらしを前にした猫のような気分になりました。
友人のみ、よく会話に出てくるツバキさんやノエルさんのみが触れる、至高の毛。
そして、私は真面目な顔で決意しました。

すっ、と頭を切り替えます。
まず、気配をその場に残しました。そういった力は魔素の利用で何とかなりますが……これがまた難しい。ですが私はやり遂げます・気配を残しつつも接近したことに気がつかせない、無駄に高等テクニックを行う。

そして私は諜報員として培ってきた気配の消去。そしてあとはゆっくりマコトさんに近づきました。

三歩、二歩、一歩と近づいて……

もふ

任務へと向かう輸送機の中で、私はハザマさんについて考えていた。

ハザマさんの正体、本人に聞いて返ってきたのは、何者であるか分からないという答えだった。

考えてみれば無神経な言葉だ。一番不安だと言うのはハザマさん自身の筈だったのに。

小さくため息をついて外を見た。雲の上に立っているような感覚は、統制機構の諜報員となって初めて感じる。

「（……らしくないな）」

本当にそう思う。
いつもの天真爛漫な私はどうした。こんなキャラは私に似合うようには思えない。

これではツバキやノエルに出会う前の私よりらしくない。前の私は周囲に反発してたけど、まだ前を向いていた。
なんでこうなったか考えてみる。
私のやってしまったことと言えば、ハザマさんに失言しただけだ。
友人を傷つけるような事を言ってしまった事の自己嫌悪しているのだろう。

「（……ん？）」

考えてみると私がブルーになっている理由が、最初からおかしい。
上官とは言っても、友人としてはもうハザマさんには謝った。だったら私はもう何時もの通りになっているはずだ。
事実、私も学生時代はジン・キサラギ先輩という男の友人ともいえる人も居た。
以前家族のことを尋ねたとき、ハザマさんのときと同じように地雷を踏んだのを覚えている。だけどそのはすぐに切り替えることができた。

だけどそれが無いのは……

「（……寂しい、のかな？　そういう友達としてのやり取りが、ノエるんたちと出来ないのが）」

だからハザマさんとやり取りをしているとき、そう感じてしまった。
任官してまだ一年目。ノエルといいツバキといい、部隊に馴れるのに精一杯で、直に会うことはまだできないと考えた。
今はまだ忙しい二人に迷惑をかけるわけにはいかない、多分私はそんなことを考えていたのではないかと思う。

……うわ、ますます私らしくない。

メールもあるし電話もあるし無線もある諜報部、連絡する手段はいくらでもあるだろう。
だったら連絡すればいい。そう考えてみると、ブルーな空気を出してハザマさんに迷惑をかけているのが、申し訳なく感じてきた。
諜報員になったのだから、顔に今の感情を表すのを改めた方が良いだろう。

ふっ、と息をついて私は顔を上げた。
とりあえずハザマさんに迷惑をかけたのは後で謝るとして、今やるべきは任務への集中だ。
意識を切り替える。普段の私から、任務を行うための自分へ。

……よし！！

もふ

……出鼻をくじかれた、というのはこういうことを言うのか。
集中し、思考をシリアスに変えようとした次の瞬間、尻尾からの感触にその集中は四散した。

ハザマさんは動いていないはず、部屋からの気配が動いていないいからそう思っていたのに、いつの間にかその気配は私のすぐ後にある。
どうやらハザマさんは動いていない、という気配を気で維持したまま気配を隠して私に近づいたようだ。諜報能力の無駄使いだと思うのは、私だけなんだろうか？

もふもふ

……というか、ハザマさんは私をなんだと思っているんだろう。
尻尾と言うからには、尾の逆で一番先にあるのは私のお尻だし、一応これでも私の性別は女なんだけど。

もふもふもふ

遠慮なんてなかったかのようにもふもふするハザマさん。手つきがいやらしいとか全くなくて、完全に愛護動物を愛でる手つきだ。
私は叫ぶべきなのだろうか？　いや、ハザマさんは友人だし、友人に尻尾を触られるぐらいで怒鳴るほど私も狭量じゃない。
でもなんだろう、初めての男性の抱擁が尻尾にもふもふというのはいかがなものか。

もふもふもふもふ

「……」（＃＾ω＾）ビキビキビキビキ

「ふんっ！」ボフン！

「ぎょえへ！？」

とりあえず尻尾に力を込めてハザマさんを吹き飛ばす。
そこにはガツン、と見事に後頭部が壁へとぶつかるハザマさんがいた。
勿論私は上官相手だけど後悔はなかった。

――――――――――――――――――――――――――――――
―――

気分は……そう、剥かれたてのゆで卵。艶やかな白い身体を見せ付けるように、私の表情も艶やかで素晴らしい笑みを浮かべているのでしょう。

……こぶができた頭以外は。

「……聞いてるんですかハザマさん？　もう到着したんですから支度して下さい」

「ええ、大丈夫。もう準備万端ですよマコトさん？」

そうして笑う私にジト目で返すマコトさん。

どうやら私が無断で尻尾に触った事に対して怒っているようです。

でも仕方ないじゃないですか。会話したくてもできないフラストレーションの蓄積状態で、あんな魅力的な尻尾を振るのが悪い。ええ、

そうに決まっています！
と、どうやら私の強攻策が上手くいったのか、マコトさんの表情もほぐれたため、結果オーライとしましょう。ある程度の緊張感は必要ですが、必要以上に固いままでは上手く動けませんから。
まあ、慰謝料に高級料理店奢りという代償が出ましたが、大したことでも在りませんし。

……？　そういえば私はどうしてそこまでマコトさんに気をかけてるんでしょうか？
そもそも私がやったことってパワハラですか？　嫌がる女性に対してお尻（尾）を触る私……やばいですね。気をつけなければ。
どうも、マコトさん相手だとスキンシップが行き過ぎてしまうようですね。なんででしょう？

そう考えたのもつかの間、多分私が”楽しい”からだと考え直しました。

……
……
……

さて、と。任務です。おふざけはこの辺りまでにしておきましょう。

すてーじ7（後書き）

次回あたり、たぶん本当にシリアスになればいいと思います。

すてーじ8（前書き）

今回はシリアスです。

すてーじ8

とある階層都市の下部に位置するその場所に、諜報先の研究施設はありました。
軽口を叩きながらも此処まで来ましたが、マコトさんも任務に入るための表情へと変わっています。
研究所入口が見える森の中から、マコトさんと最後の打ち合わせをしました。

「私はバックアップである事と、別任務が有るため指示は出しません。どうしても判断不能の場合のみ、渡した通信機で連絡してください」

「はい」

「ナナヤ少尉、任務の成功を祈っています」

「はっ」

別任務、とは此処に関与している上層部（お偉いさん）の証拠を消せ、という奴ですね。流石にそれをマコトさんにやらせるわけにはいきませんから。
マコトさんは研究所を潰すための証拠を取ってこいと。
あと事前情報ではそこまで危険な場所でも無いので、見つからなければ楽に行けるでしょう。

さて、そこで私はマコトさんと別れると、すぐに研究所へと侵入しました。

簡単に侵入した、とは言いますが、事実侵入するのは簡単です。以前私がイカルガ戦の敵本陣に突っ込まされた件の隠密術式の魔導具が、一応の完成を見せたのですから。

ローブのような、防寒着のような黒い衣装ですが、隠密性は抜群。師団長クラスの実力者でなければ、同じ部屋に居ても認識できないというスグレモノですよ？　赤外線は自力で避けましたが、侵入は余裕でした。

……装備した人が術式を使うと隠密性がぶっ壊れるのは変わりませんけど。

つまり、何もしない限りは見つかる可能性も無いのです。

「（しかし……変な場所ですね）」

研究所、と言う名称には偽り無く、白を基調とした空間には独特の薬剤の香りがします。

扉から研究員が出てきたため、入れ替わるように部屋へと入りました。

数台の情報端末に、重ねられるように置かれた多数の書類があります。

実は、重要な案件については、媒体が紙であることが多いのです。

電子端末の方は、レリウス博士特製ウイルスに任せておきましょう。

私は何枚か書類を手に取って目を通しました

……ふむふむ、外的要因による術式敵性の増加、薬に於ける魔素運用法、魔素抗体細胞の開発……。

おお！　素晴らしいですね！　魔素の利用についての考察は統制機構でも行われていますが、それを利用した魔獣の精製などには手をつけていません。

ですから、この研究成果を統制機構に送れば、かなりの待遇が期待できるでしょう！

……無論それが違法でなければ、ですけどね。

被験者の待遇、……まあこれは言うまでもないですね。

実験を行った被験者は一応、生きてるといったとこですか？

で、その被験者と言えば、浚ってきたか貧困層から買ってきたか。

まあー調達先が階層都市の最下層からなら不思議でもありませんけど。

で、実験の内容は……

「……あらら。これ、マコトさんが見たら大変でしょうねぇ」

実験内容は……一般的に残酷非道と呼ばれるものですか？

魔素中毒汚染を軍事利用へ移せるか。獣が魔素に汚染されたのなら、人を汚染した場合の『魔人』へ進化させる事は可能か、といった仮定を、実際に実験していますね。

で、使えなくなった被験者は魔獣に食わせるか、焼却するか。

まったく、大したリサイクルです。環境に悪くないだけ幸いですか？
送られてきた情報には、危険性とかぐらいしか書いていなかったため、こういった存在があるのは予想外でした。

「ん～、流石に参りますねぇ。情報に差異が有ると困るのはこちらなんですから……」

きちんと纏めて、注意点ぐらいは書いといてくださいよ。
私は　情報を纏めた下士官を想像して、軽くため息を吐きました。

相手はこちらを機械か何かと勘違いしているのでしょうか？
行動するのは私たち、肉体がある人間なのですから、紙に書いてあるよう動けるとは限りません。

と、どうやらクローバー大佐のウイルスが処理が完了したようです。

……？　変ですね。お偉いさんの失態の証拠は無いように見えますが。

あることと言えばここの機密だけです。
どうやらこの場所にも『窯』と呼ばれるものが存在し、研究を続けているようです。

そして……最終目標としては、人は神へと至れるか。『蒼』へと辿りつく事ができるのか、それを調べる実験……

蒼？

「……あ……お？」

その言葉は、まるで私の中に最初から存在するかのように、すとんと頭の中に染み渡りました。

全ての感情が単調に感じて、そしてただ『蒼』という言葉のみに頭の思考性が向けられる。

まるで私の感情という感情が、全てが嘘であり、私の全ては蒼のためにあったかのように……

私に、本当に、感情が、有る？

私がこの情報を、被験者となった人達の情報を見て、私は何を感じた？

被験者に対する悲しみ？　無い。
実験者に対する憎しみ？　無い。

違う、興味が無いだけです。例えば今現在進行形でどこかで傷ついてる人が居ても、私は何も感じません。

それが、この研究所で行われているとしても。
諜報部に居る私にとっては当然でしょう。私が『私』ならば人が死ぬことに何か思うのは……

「……あ…れ？　お、おかしいですね？」

ぐらりと視界がぶれて、私は思わず眼をつぶりました。

死に対しての嫌悪感。それは確かに私にも存在するのに、それが頭の中では嘘であると回答します。
嘘？　嘘なのだろうか？　私の、私の、……

ほんの数秒、私は眼をつぶっただけです。
だと言うのに……

『なにが可笑しいんだ？　ハザマちゃんよ』

『彼』が、私が普段見ているはずの顔と同じ人が、私の視界の入りこんでいました。

――――――――――――――――――――――――――――――――

そこは、私には、擬似的な地獄でも作り上げたかのようにも見えた。

潜入に成功し、違法研究の証拠となる物は集めたから、任務もほぼ成功した。その時に感じていたのは歓喜と安堵だった。

もちろん油断はしていない。渡された隠密の術式を装着させた魔導具があるとはいえ、使い慣れていないものに頼るほど未熟でもなかった。

だけど、次に感じたのは憤怒。

この研究所で行われていた研究の残虐性、物理的外圧耐性の調査、新薬投薬、獣人が保持する魔素汚染による耐性調査、新型細胞の移植……

それは明らかに非人道的な研究であり、このような扱いをする研究者たちには嫌悪感しか浮かばなかった。

そして、三つ目に感じたのは……

「（……うっ……おええ）」

その光景に対する、はっきりとした拒絶。

空調ダストの合間からその光景を見たとき、私はたまらずその場に胃の中身を吐き出した。

元より胃に入っているものなんてない。それがけが不幸中の幸いで、暗闇でも胃液ばかりの吐瀉物がやけにリアルに感じた。

再度、その光景を視界に入れる。情報を得ること、それこそが諜報

員の本質であり、やらなければならないこと。
だけど、それは私は見たくはなかった。

『蒼、アオ！　蒼！蒼！蒼蒼蒼蒼蒼蒼蒼キィシシシシシィ！』

『体が消　る早く　オを　求め　けれ　、いや　食う？　消える？
食う、食う、食う！　食う！　食う！』

人の形だったはずの者が、黒い液体状の物質へと変わる。左右の目が別の方向を向き、口から涎を流し呻く者がいる。
隣に居た者の姿を見て、舌を噛みちぎり絶命している者がいる。
降ろされたガラスのシャッターのみに遮られ、次の死を待つ被験者がいる。
それを見ても何の感慨もなく資料片手に書き込みをする研究者がいる。

その現象を私は知らない。魔素中毒の結果がこれではないはずなのに、私は人間から黒い魔素の塊になった存在に気持ち悪いと考えた。

違う、本当に気持ちが悪かったのは、この研究所全体から流れる空気だ。
淀み濁り、それを良しとして汚染を続けるこの場所の空気。まるで正常であることこそが異常であると言わんばかりの光景。
最初から感じていた。潜入任務としても、二人という少人数での行

動は私は初めてだった。だからこの淀んだ空気に深刻には思わなかった。

全部、”正常”なのだ。人が喰われることも、死へと向かうことも、それを肯定さえすることも。この場所、この空間では。

「（……どう、しよう）」

腕で口を拭い、私は停止していた頭を動かし始めた。

目の前の光景に対して思い描いたことは一つだ。
この研究を壊し、被験者たちを助ける。自分には今成せるだけの力があり、すでにそのための気力は問題ない。
意気は消沈している。だけど、目の前に広がる光景にいる者たちが敵だとするならば。
装備した十字のトンファーを握りしめ、小さく息を吐いた。
本来諜報員に戦闘技能はそこまで重要ではない。だけど私がここにいるのは、友と呼べる二人の力になりたかったから。
共に衛士になると思っていたノエルはキサラギ先輩の秘書官として引き抜かれ、ツバキは始めから私達とは違う部隊に行くと決めていたようだ。
私が彼女達と共に立つ事は無い。だから私は諜報員となった。諜報員という立場なら、二人が本当に困ったとき、力になれると思ったから。

私が此処に居るのはそんな因果だ。
諜報員としても、衛士としても私は今十分戦える。

だけど、

「（……越権、いや逸脱行為、かな）」

諜報員が情報を集め、衛士は武力をもって摘発する。
早く事件を解決するために、一番始めに情報を集めるという立場。
私のしようとしていることは、ここから大きく外れていた。

小さく息を吐いて、通信機の術式コードを入力する。
砂嵐の音が聞こえたのも束の間、糸がちぎれたような音が聞こえて向こう側と繋がった。

「……ＴＧＭＪＤＡＪ」

『ＡＧＴＧＰＭＤＧ。はい、何が起こりましたかマコトさん？』

規定の暗号文を伝え返ってきたのは、いつもの飄々としたハザマさんの声だった。
だけど、心なしかその声は暗い。

「ハザマ大尉、実験内容と資金源のデータを回収しました」

『ご苦労様です。では、今から撤退しますので準備を……』
「そして今実験を行っている場所へと立ち合いました」
『ーーーー。』

ハザマさんが小さく息をのんだのが聞こえる。その反応に私は分かった。

『そうですか。ですが今は撤退しますよ』

『ハザマ大尉は実験がどのような内容なのか分かっているのですよね？』

『……ええ。資料に書いてない場所の事は予想外でしたけど』

目の前の、人を人として見ない光景を、ハザマさんは知っていると言った。
だけど、私には退けと言った。
当然だ。諜報員としてそれは模範解答だ。私の行動はそれから真っ先に反発するものだから。

「……データは私の端末から本部へと送りました。私は少し用事ができましたが、合流時刻までには帰還します」

『マコトさん？　貴女は何を考えているんですか！？』

「……」

私はハザマさんのその言葉を最後に通信を切った。

やらないといけない事がある。

目の前の光景をぶっ潰して、皆助け出して帰還すること。
口の中でゴメン、と小さくハザマさんに謝った。
だけど、それでも私は納得ができないから。目の前の人だけでも救いたいから。
そのための力を振るうために、私はゆっくり拳を振りかぶりった。

すてーじ8（後書き）

ようやくこの小説の第二の主人公である『あの人』を出せそうです。
ついでに言うなら次で第一章終わりです。

The wheel of fate is turning（前書き）

止まらないシリアス。
オリジナルな設定もあるので注意してください。

The wheel of fate is turning

一方的に切られた通信に、私は思わず奥歯で歯軋りしていました。
勝手な行動をとられた事に面倒だと思うことと、無関心であることがいっぺんに溢れ出し、また違和感に対して目眩が起きたからです。

「おーおーおー、ヤベーなおい。独断行動なんて面倒なことよくやるもんだな、お前の部下は」

「……あなた…は？」

額を押さえて目の前の存在を睨みます。
ダークグレーのスーツに緑の髪を隠す帽子。そしてその表情には三日月のような笑みが張り付いていました。
『彼』が何か。　頭の中では理解してはいたのでしょう。
もしも私が普通の状態だったとしたなら、気楽に話し掛けていたのではないでしょうか？
ですが今はそれができない。『私』という感性が不明確なものとなって認識できない今の私は、不安定な存在であるのでしょう。

「あん？　なんだよハザマちゃん。七年間もずっといたのにそいつは悲しいじゃねぇか」

……成る程亡霊、ですか。言い得て妙ですね。

「貴方が『テルミ』ですか？」

「ああ」

かつて、私の身体に亡霊が居るという医者の話は的中していたようです。

目の前の存在には気配がありません。魔導具を使用しているようにも見えず、私は目の前の存在が『存在していない』と認識しました。

……性格が悪いとは思ってはいましたが、話さなくても目の前の笑顔の形だけでもその事は納得できますね。

頭痛を伴いながらも、机に寄り掛かっていた身体を起こしました。

……妙ですね。私、という存在は目の前の人物に何も思いません。そもそも何かに対して何かを思うことができません。

何が喜びで、何が哀しみで、何が楽しみで、何が……

「そういう俺の『人形』は、いつまでそうして遊んでいる気なんだ？」

そろそろ操り糸を直す気にはなったのか？

そう続いた言葉よりも、私の中に残ったのは文の中の単語だった。

『人形』と。

『彼』は私へ楽しげに嘲笑(わら)いかけた。

「人…形？」

「そう、人形だよ。お前っていう存在は元々俺がこの世界へと存在するための器だ。……だっていうのにお前は俺の器を満たして突然に現れた。まあーこいつはレリウスのミスだ。あのオッサン、適当に機能やら実験やらやったから、お前っていう魂ができたんだろ。お前を責めるつもりはねぇよ」

ぐしゃりと、影が身体を飲み込むかのように、『彼』の言葉が私を侵食していく。

これが感情で表すならば『哀』なのでしょうか？

誰もが探していたはずの存在理由は、目の前の存在のためだったのですか？

声が、がらんどうに響く声が、『私』という存在を崩していく。

「『窯』の上に建てられたこの場所なら、一時的とはいえお前が『蒼』に覚醒することもできる。現に干渉術式を展開しなくても、俺はお前の前に存在してんだろ？　いやー苦労したわ、俺がいろいろやっても大丈夫な場所探すのは。ぶっちゃけ役立たずの窯なんてそうあるもんじゃねぇから」

「……貴方は……『何』ですか？」

「何者、じゃなくて何と来たか。へ～、知りたいのか？」

正直、ここで実行に移すための苦労話は、耳の中に入っていません。ただ、ここにいる私はやらなければならないのです。

気が付いたのです。今の私には足場がありません。

私、という存在を確立させるための足場がない。何者かも分からず、身体的の感覚はあるのに世界という存在に刺激が無い。

『私』という魂が体から抜けたように感じた。

だから取り戻さなければならなかった。感情を、そこから抜け落ちたものを。

「『はぁ？　『取り戻す』？　お前本気でそれ言っちゃってんの？」

私の考えた言葉に『彼』は本気で呆れたように答えた。
なぜ、とは聞けなかった。それよりも『彼』が私に答えを返す方が早かったからだ。

「あ、今なんでって思った？　分かって当然だろ？　『俺はお前』だ。俺のことを俺が分かんねぇ理屈があるけ無ぇだろうが！　そ・も・そ・も、別に俺は何も奪っちゃいない。お前が俺を見て感情ってやつを模倣していただけだ」

私の感情が、模倣？

「ぎゃっはははははは！！　そうだその通りだ！　今の今まで気が付かなかったのかよチョーウケる！　お前はただ染まったと思い込んでいただけだ。俺という存在が捨てたどうでもいい感情。それをお前の魂が得て廃棄した色を模倣した。一般論理を基調にした偽りの色。こうであるだろう、という外界からの刺激を俺の捨てた感情にフィルターを通して見ただけの世界、それがお前の持つ全てだ。お前が作り出した線引きなんてものは全て偽物なんだよ。お前、ここまで言ってなにも分からないのか？　何色でもなく何色にも染まっていない無色。そうだ、お前にはもともと感情自体存在していない。奪う、とお前は言うが俺は返してもらっただけだ。なあ、そろそろいいだろ？　お前の『嘘』の世界を見るのはもうやめだ。そろそろ返してもらう」

ニヤリ、そう『彼』は三日月のような笑みを見せる。
伸ばされた手は私の頭をつかみ、私の視界は掌によって塞がれた。
その瞬間、帰ってくる。
無色だったはずの景色に色が付きました。
『彼』の言葉に対して持った絶望、哀と呼ばれる感情、それが溢れだしていたのです。
だから、理解してしまいました。
今の私、というのは嘘、嘘でしかない。
この身体もそう、この世界を見ることも、この世界に寄せる感情も、それは私ではなく本能的に『彼』を通した世界でしかないのです。
私は、自身が『無色(わたし)』であることを知ってしまった。
記憶喪失だと考えていたのは、無意識のうちにそのことを頭の片隅に置いていたからでしょう。
ですが、レリウス大佐によって造られたこの身体にはもともと記憶はなく、ただ技能だけがそこにありました。
魂に色が無く何も感じない。それは足元が無であり、どこまでも落ちていくような恐怖がありました。
だから、『彼』の差し出された手は甘美に見えたのです。

「次元干渉虚数方陣展開」

『彼』が呟いたその瞬間、私という存在に新たな色が混ざりました。自身の作り出した『蒼の魔導書』。境界へと触れ蒼の力を取り出す様に、『私』という存在のあるべき姿が、そう

『彼』が、世界に蓄積された彼の智が流れ込んでくる。

私の周りの空間へと魔方陣が展開されていました。

なんと、綺麗な世界なのでしょうか。
その世界には『嘘』が無い。私という存在が、私が、『無色』であるはずの私が見る世界が、嘘ではない。

当然でした。この世界を見ているのは『彼』です。『彼』が見ているからこそこの世界は本物へと変わっていきました。

喜び。『彼』の見る世界は『彼』の喜びで満ち溢れています。

私が、『彼』となっていくのが感じました。でも、それが私はとても素晴らしいものだと思ったのです。

そこに感情と言う名の色があるのですから。

こんな、偽物ではなく、本物の世界を見ることができるなら、偽物である私は……

『彼』の手によって塞がれた掌の中で、私はゆっくりまどろむように眼をつぶりました。
ひどく眠いのです。暖かい意識の中に私が溶けていくことは『本当』であったから、それがとても心地よいものであったから、

私は、このまま、『彼』に……

「やれやれ、あと少し、といったところか。じゃあ、やることやらせてもらうとするか」

ーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーー

魔素の黒い塊が最後に残り、被験者達が黒い塊の餌になろうとしている。

今回の実験は強い魔素中毒者に肉体を与えること、そしてどこまで生物兵器として利用できるかの実験らしい。

生物兵器とされるのは、今回被験者達を喰らい人ぐらいの大きさとなった黒い塊だろう。

半液体状の身体を纏めるように頭の部分には白い骸骨の仮面があり、その姿は見方によっては布にも煙にもスライムにも見える。

次にその黒い塊が眼を付けたのは、その被験者達と言う名の食料だろう。

それを思い返す前に、私はダストの入口を拳で突き破り、部屋へと飛び降りた。

瞬間、被験者と黒い塊を遮っていた強化ガラスが左右へと開いた。

突如現れた私という存在に誰もが眼を白黒している。それを無視して動く存在は二つだった。

一つは私、もう一つが食欲のみで動く黒い塊だ。

強化ガラスで遮られていた被験者達へと、黒い塊はぐちゃりと音を立てて飛び込んだ。

黒い塊の腹に当たる場所が開く。そこには獣の口のように無数の歯が存在していた。

その様子を見た被験者は恐らく恐怖があったに違いない。

だが、その歯が到着する前に、私の拳が顔に当たる部分へと突き刺さっていた。

「ーーー！！？！？」

壁に投げつけた泥団子のように黒い塊は壁へと激突する。
手に付着した液体の臭いに私は思わず顔をしかめた。獣を素手で殺したように、手に着いていたのは黒く変色した獣の血だった。

白い骸骨の面がこちらへと向く。
体勢を整えるのに使われたのは人間の足の骨だ。ゴミ袋から鋭利な廃材が突き出るように、その身体からは無数の長い骨が見えている。

「お前　ぜ　しの邪　る？」

ノイズまみれのラジオみたいに聞き取りにくいその声に、私はふんと鼻をならした。
目配せしたのは後ろにいる被験者たち。数は3人で全員少年少女と呼べる年代の子供だった。
眼には光が無く、
次に目配せしたのは、上から見上げてくる研究者たち。殆どの人が白衣を着て、私と言う存在を対処するために、慌ただしく動いている。

やがて耳障りな警告音とともに、赤いランプが辺りを囃し立てた。
続々と集まってくる気配と、目の前の私へと標的を変えた黒い塊に私は小さく舌打ちをした。
この研究所で雇っていた傭兵か、それとも警備員か。

どちらにしても関係ない。ハザマさんには悪いけれども、もう行動は起こしてしまった。
あとは生き残るだけだ。

「あなた……だれ？」

被験者の一人である黒髪の少女がそう私に訊ねた。

「統制機構です。あなたたちの保護、救助に来ました」

私は小さく微笑みそう返した。

――――――――――――――――――――

実験室へと現れた一人の侵入者を、その老人はモニター越しでその様子を見ていた。
頭は全て白髪へと変わり、よれよれになった白衣とその身体に刻まれた皺は生きてきた年代を想像させる。
その男はこの研究所の所長だった。けたたましく鳴る警報の音にも、視界を阻害するような赤いランプの警告表示も、興味を持った様子はない。

ただ実験が止まってしまったことに対して、残念だと思う程度が今の男の現状だった。

「所長！　なにを悠長にしているのですか！　ガサ入れが入ったんですよ？！」

そんなことは言われなくてもわかっている。
生粋の研究者しかいないこの場所では、あの侵入者を処理すればどうにでもなるということに気が付かないのだろう。
改めて自身の研究気質と周りの無知さにため息が出る。

だが、男も内心ではもう潮時とも考えていた。
施設の周りには非合法ではあるが守るだけの戦力は揃えている。だが、中への干渉はまた別の話だ。

この施設は統制機構の法に照らし合わせるならば、非合法であるわけではない。

なぜならこの施設は今なお、統制機構の管理下の場所なのだから。

本来この施設は窯の調査と、魔素に関する研究を行う場所だった。
だが窯の存在とその叡智、『蒼』へと惹かれてしまった男が居た。
それが、この研究所の所長だ。
研究者としての探究心、そして蒼の引力によって魅せられた。そこから実験はエスカレートしていったと考えてもいいだろう。

「……所長！聞いているのですか！」

「聞いておる。少し黙るといい」

ほかの連中はとっくに地下の避難所へと行っているのだろう。
無駄なことだと考えた。統制機構の汚物は統制機構が処理をする。
今更逃げる程度で『あの師団』から逃げられるとは到底考えることなどできようもない。

「ふむ……今宵も蒼へと到着することは叶わんか」

境界を除いた結果知りえたことはどれも同じだった。ただこの世界がいつまでも繰り返し、いつどの場面でも自分という存在はこの場所で朽ちていく。

ただ、今回侵入者がひそかに入り込んでいたのは想定外ではあったが。
『あの師団』ならば隠密なんてものは関係ない。処理のために時には殺害さえも辞さないだろう。

となりで何か話しかけてくる研究員の声が無くなった。

見れば、その喉からは鋭利な刃の切っ先が顔を見せている。
その数秒もたたないうちに、それを取ろうともがく研究員の頭に新たなナイフが突き刺さった。

「こーんにーちわー。ちっとゴミ処理に来たんだけど、まだ生きてっかジジイ？」

横にスライドするタイプのドアをわざわざ蹴破り、入ってくる声が一つ。
毒々しい緑の頭は帽子で覆われており、身体はダークグレーのスーツで着こまれている。
印象に残ったのは男の顔に張り付いている三日月の笑みだ。相変わらずだ、と男はごちると、椅子を回してゆっくりと対面した。

「ふむ……今回は些か早かろう。私用でもあったかな？」

「今回も、ってことはジジイも相変わらずたどり着いたわけだな。ま、ベタな言葉で言うなら、これから死ぬのに能書きもなにも必要ねぇってことだ」

「カカッ、それもそうだ。テルミ、貴様が言うとやけに様になる」

男は理解していた。
自分はこの世界を微塵とも動かすことはできず、ただ蒼に魅せられた愚か者が居た、という記憶だけがこの世界に残ると。
蒼に惹かれ流れ込む知識に意識も体も崩壊した者を今回の実験に用

いた。
殆どの者は既に汚染はC、もしくはDまで進んでいる。もとに戻る術は存在しないだろう。

「テルミ知ってるか？　この研究所は魔素を使った人間の進化実験を主としていた」

片手で椅子の横にある情報端末を操作する。

「だがそれは、他の実験動物で成功例が出たからこそ、進化できるという仮定は存在する」

あたりに紫色の警告灯が視界を埋め尽くした。
瞬間、壁だと思われていた場所が上下に開き、そこに空洞ができる。
そこから見えたのは無数の光る眼、生きたものの存在がそこから溢れテルミの周りへと姿を現した。

「……魔獣、ねぇ。俺が獣クセェのは嫌いだってわかってやってんのか？」

そこには、黒く汚染されたオオカミ達がいた。

大戦期、黒き獣の存在によって汚染された獣たちの末路。現在は魔

素に対して抵抗のある動物も増えたが、それを無視して人工的に魔獣をつくっていた。
呆れが全部で埋め尽くされたテルミは、大きくため息を吐いた。スーツのクリーニングだってただではない。汚したくはないというのが本音である。

「まあジジイがここで死ぬことは変わり無ぇんだけどな」

なんの殺意も無くテルミの手から放たれたナイフは、吸い込まれるように男の頭へと突き刺さる。

自分にナイフが刺さった、と気が付いたのは死ぬ直前にテルミがため息をついているのを見た時だ。

この体も、魂も、蒼へと回帰する。なれば今度こそ蒼へとたどり着けるかもしれない。
男が思考を動かすより先に、体のすべての身体機能が止まるほうが早かった。

「さてと、窯の情報も研究員も全部殺った。あとは……ゴミ処理部隊に任せるとするか」

テルミは周りの魔獣たちを一目見て、おおきくため息をついた。

The wheel of fate is turning（後書き）

次回は次。

すてーじふぁいなる（前書き）

独自設定がかなりあります。注意してください。

すてーじふぁいなる

風景が高速で周りを流れていく。だというのにその光景全てが私の頭へと流れ、そして理解していきました。

『私』という存在が、『彼』という存在へと、変わっている、いえ、溶けている、という言葉が正しいのでしょう。

同時に流れてくる『彼』という存在の情報。ただ押し責める急流のように頭の中へと駆け巡りました。

「お前は偽物だが本物だ。お前であると同時に俺でもある。だからこそわかるだろう？」

それは境界を通して見た、一人の青年の姿でした。

甘い、綺麗なだけの世界に訪れた世界の汚点。それがその青年へと笑いかけました。

その結果、無垢の、黒き獣の瘴気すら浄化するその少女を、『彼』は騙した。それが始まり。

その時の感情が、その時の世界が、私も『彼』であったときのように歓喜という感情を見せました。

綺麗なだけの、嘘だらけの世界。

なんて気持ちの悪い世界なのだろう。そこに居ることの意味さえ知らず、誰もが自分の足元も分からず過ごしている。
だというのに、顔に笑顔を張り付かせ生きている。隣の不幸も知らず、本当の幸福さえ知らない。
なんて、つまらない世界なのでしょう。

だから、壊す。

この嘘が満ちた世界を、限りある本当でリアルへと変えていく。
そして世界には本当だけを残す。甘い、気持ち悪い、そんな世界を良しとしない。

そのための力。そのための、『彼』……『テルミ』という存在の復活。

私は、『彼』が見る世界に惹かれていくのが……いえ、『彼』へとなっていくのが感じます。

周りに映る世界が何もない、無色へと変わりました。
それは境界を通して見た、本来の私という存在の姿でした。
この躰は、人形師レリウス・クローバーが本当の持ち主が宿すために作り出した。

つまり、私という存在はもともとの持ち主へ躰を戻すために存在していたのです。
だれもが生きる目的を持っている。今までそれを知らずにいた嘘の『私』はすでにここには存在せず、本当である私がここに居ます。
それなら私は、ここで溶けていくことが本当になるための唯一でしょう。

だが、それも悪くはない。
だって、私という存在がこの世界を『真実』へと導くための礎となるのなら。

今だって情報の奔流は続いている。
だというのに『私／俺』はゆっくりと目を瞑り、その心地よさに身をゆだねました。

『ハザマさん』

だというのにその声が、聞こえた。

風景は変わりました。

いつか見た木の上、缶入りのお酒を飲みながら『マコト・ナナヤ』と酒盛りをする光景。

記憶の焼き増しであることは、その光景を少し離れた場所で客観的に見ている『俺』がいるからだろう。

くだらないことを話し、くだらないことで笑い、くだらない時間を過ごしている嘘の『私』という存在。

なんて滑稽だったんだ、と一人ごちた。

その姿は、人形がまるで自分のことを『本当』だと思い込みながら、真実さえも知らない『嘘』と笑い合っている。

思わずその姿に嫌悪した。『俺』が獣臭いもの自体が嫌いだということもある。

頭の中でイメージとともに、蛇のような鎖をその場で出現させた。

アークエネミー、戦い方、殺し方。『俺』のすべてが躰へと情報となって巡ってくる。

この空間に対してなぜか激しい嫌悪感を抱く。気に入らない。この光景が存在している自体、『俺』にとっては気に入らなかった。

この空間が『私』の見る光景なら、終わらせる。こんな世界を『俺』は望んでいない。そのために……壊す。

術式を発動する。

アークエネミー・ウロボロス。自分の最たる力を今ここに発動させた。

＼さあ、始めよう。『俺』が望み『俺』が叶えられる世界に戻るために／

＼さあ、始めよう。『私』が望み『私』が愛(いと)しんだ世界へと戻るために／

「……あ？」

その声を出したのは『彼』でした。
『私』が見ていた光景、マコトさんと私が談笑する姿へ向かって伸ばしていた『彼』の腕を、私は掴みました。
瞬間、すれ違う二振りのダガーナイフ。首元へと向かう『彼』のそれをダガーナイフで弾き、術式による跳躍で互いに距離を取った。

「「ウロボロス！！」」

互いに向かう緑の蛇を模した鎖が宙の空間を掴む。鎖を収縮させつつ大きく円を描くように跳躍した『彼』は、懐の投合用ナイフをこちらへと投げた。
それを私はウロボロスを振るい全て叩き落とす。
着地しだらりとした構えを見せる『彼』は、片手にダガーナイフ、片手の指に統合用ナイフを掴み、忌々しくこちらを見た。

風景が変わる。
そこは大きな円状の部屋だった。
照明が存在しないにも関わらずぼんやりと視界が分かるその場所の名称が、境界から流れ込んでくる。
イシャナ、聖堂の最深部、ある青年が『真実』へと変わった場所。

ハザマにとってこの研究所が『真実』への入り口なら、青年にとってはそこが入り口だと言えるだろう。

「……なんでお前が此処にいやがる。ああ！？　ハザマちゃんよ！？」

「なぜと言われましても……ここ私の精神世界ですし。あ、ウロボロス使い方わかりましたよ。こんなに便利なら初めから教えてくれればよかったのに」

ナイフだって馬鹿にできない値段するんですから……

帽子を直しながらため息をつく姿を睨みつける。ひょうひょうとした姿からは自分の気配も感じるというのに、完璧に『ハザマ』へと戻っていた。

私はダガーナイフを構えつつ、『彼』へと視線を配っていた。

相変わらず流れ込んでくる情報が邪魔だと思いつつも、『彼』の戦闘に関する知識は大したものです。

……というか、アークエネミーというトンデモ兵器を説明書無しってどんだけ危ないんですか。めちゃくちゃ重い隠密術式の魔導具だって説明書ぐらいありましたよ。

くそ、今回の任務も結局魔導具壊れましたよぜったい。請求書とか来たらどうするんですかもう！

それよりなにより……私に取りついていた悪霊とやらが面倒な人だった件について。どうしたらいいんでしょう。

いや獣兵衛さんとなにやら陰険な仲でしたからなんとなくは分かりましたけど……とりあえずテルミさんはマジ鬼畜です。私？　いやノーマルです。

「……境界からの知識はお前という存在をぶっ壊すほどのもんだ。馬鹿な科学者がゴミに成り下がったようにな。だから俺の魂と統合しようとした。俺ならそれをどうにかできる。……だってのに、どうしてお前が存在してんのにこの躰は汚染されない？」

「うーん……それなんですけど……、ほら、境界から主に流れるのは他の世界の自分についての記憶なんですよね。ほら、どこの世界も私居ませんし」

流れてくる知識がありませんよ。流れてくる知識はほとんど貴方とかについての知識ですよ？
それにゴミって、たしか今絶賛指名手配中のアラクネさんですよね？　下手したら私もああなってたんでしょうか？

「んー、いろいろ知りすぎてちょっと混乱しましたけど、貴方にとっては少し時期が遅れてしまったようですね」

「時期……だ？」

おそらく彼の目論見だと、境界へと接触させ私が『無』であると理解させ、その間に魂を統合しちゃいましょうと、そういう考えがあったのでしょう。

だからそのために私という魂の色が染まりきってはいけない。現に、イシャナでの青年は染まりきっていませんでしたから。

『私は私であると同時に彼でもある』

それは私という魂が『彼』の魂に染まりきろうとしたから、そう錯覚した。

「ただ、私は知ってたんですよね。貴方ではなく、私の中にある『真実』というものの形を」

確かに私は喜び、悲しみという意味を貴方の捨てた魂を通して知った。

それから生きていった六年間、私は本当の私の感情へと出会うことが無かった。

死に対しては仮初の嫌悪感を抱き、酒を飲むという行為に嘘の喜びを知る。

だから違和感があった。思い入れることができなかった。なぜならそれらは全て偽物だったのですから。

「でも、私が『彼女』と話した時の感情は、『本当(しんじつ)』なんですよ」

共にふざけあうことに対して、私は確かに『楽しい』という感情を見つけました。

さっきの光景、木の上で空に描かれた花火を見たとき『綺麗』だと私は思いました。

此処への移動中、居心地の悪い空気で話せない事が『寂しく』なり、『悩み』ました。

私はとっくの昔に『彼女』のおかげで、『私』という存在を観(み)測していたんです。ただ、それが今の今まで分からなかった。だから『彼』の魂に染まりそうになったということでしょうか？

イシャナで自分の魂を染められ切ってしまった青年と私、立場はほとんど一緒だったと言えるでしょう。

ですが私には『彼女』が居た。

『私』という存在を友と呼び、共に笑いあうことのできる存在が。綺麗ではない、汚く暗い、戦慄も恐怖も慟哭も憎悪も満ち溢れている、諜報部という存在なのに『彼女』がいました。

私も『彼』に染まっていないと言われればそれは嘘になります。行動を全て抜いて考えれば、確かに『真実』を重んじるその姿は私も嫌いではありません。『真実』が大切であるということも理解できます。

だからこそ、

「ですが今、貴方によって私の『真実』が壊されようとしている」

ああ、なるほど、理解しました。

これが憤怒。身体を熱くさせ、視界がわずかに狭くなる。胸から込み上げてくる破壊の衝動。そしてそれを抑える痛み。

全て、消させるわけにはいかない。

「私は『統制機構諜報部のハザマさん』ですよ。決して『私は貴方ではない』。だからこそ『私』はこうして存在している。『貴方とは違うんです』」

構えていたナイフの切っ先を『彼』へと向け、明確な敵対表示をしました。

まったく、なにが破壊して真実を露わにしよう、ですか。私の生涯目標は、安定した仕事について結婚して適当に幸福になることでしょう。地味？　生涯目標が世界を滅ぼすとかより何倍もマシですよ。なんという黒歴史化。おそらく私の立場じゃなかった大爆笑してやりましたよ。

……目の前のお方はその黒歴史の真っ最中でした。自重します。

「……ク」

と、ナイフの切っ先を向けていた私でしたが、何やら彼の様子がおかしい。
顔に手を当てているさまは、泣いているようにも見えます。

「ッくっくっく……ぎゃっはははははははははは！！！！
おいおいマジかよハザマちゃんそんなこと言っちゃうか普通。どんなギャグなんだよそれチョーウケる！」

心の底からおかしいと言った様子で、彼は腹を抱えて笑いました。
大爆笑です。
泣いているのかと一瞬でも思った私を殴ってやりたくなりました。

「うーん、そんなにおかしいことを言ったつもりはないんですけどね」

「おいおいおいおい素でそれかよおい！　やっべツボに入った。っくっく、よくもそこまであの獣臭ぇ女に入れ込めたもんだな。まあー所詮『人形』ごときには人間の女は不相応のようだな！」

「いやーその『人形』の躰を盗人のように横取りしなければ存在できない『亡霊』様は言う事が違いますね。貴方リア充できたことあるんですか？」

「おいおい本当かどうかも分からない感情に一喜一憂していた『人形』が充実を語んのか。そこまでいい女なのかよあの畜生はよ。今度穴貸せよ」

「御冗談を。自身が私の中でニートやってる非リア充が女性の事を語れるほど経験があるんですか？　ああすみません。だから盗人になって私の躰を盗もうとしていたんでしたっけ」

「くくっ、よくもまあそこまで舌が回るもんだ」

「貴方の知識のボキャブラリーは素晴らしいですね。こうして言われたいだなんて、ひょっとしなくても貴方マゾですね」

「くく、くっくっくっくっくっく」

「あはははははははは」

「……殺す」

「ぶっ殺してやるよハザマちゃんよォ！！！！！！」

ああ、頭にきた。私の事ならいい。だけど『彼女』を侮辱するなら話は別です。

召喚された互いのウロボロスが空中でぶつかり合う。

彼もそれを承知でいたのでしょう。ひしゃげたウロボロスの鎖を収縮させ跳躍し、再度体を弾くようにこちらに飛来した。

対して私は鉄鎖術を用いウロボロスを振るう。それをよけるために空中で再度撥ねた『彼』は懐のナイフを投合する。

高速で動くそれらに私の体は勝手に動き、さらに自分のイメージ通りに動かすことができる。

この場所が私の精神世界であることもあるのでしょう。

異物である『彼』の動きは、素の私でも見切れるほど陳腐なものでした。

無論、そう思わせる行動だと私も理解していますけど。

十数合打ち合った後、彼が投合し地面へと突き刺さったナイフを、つけられていた糸が収縮することによって再度私の死角から飛来する。

実戦経験の差とも言えるでしょう。その行動によって体制を崩された私は、大きく地面を踏みしめ後方へと跳躍した。

そして、追撃するようにこちらへ向かうウロボロス。
錬金によって強化されたダガーナイフで私はそれを止めようとした。
が、ウロボロスは私に到達する直前で止まっている。

「……は？」

「なに呆けてんだハザマちゃんよ！」

ウロボロスの鎖を収縮することによる高速移動。一気に密着してきた彼のナイフが私の体へと向かい、それを私は弾いて……

「牙砕衝！」

そう考えていた私の腕が、彼の弾くことを目的とした斬撃によって弾かれていました。

何故、と考えたのはほんのわずかな隙。
腕が先に動いたのは『彼』。今度こそ斬撃目的として動く彼の手を見て、私は瞬時に術式障壁を張る。

「んだそのチンケな術式障壁は！遊んでんじゃねーぞおい！」

同じく解除の術式を斬撃に付加し、『彼』はその障壁を破らんと腕を振るう。
そして現れたのは魔素によって造られた三体の蛇。
何度も解除を目的とした斬撃に障壁はほとんど破られ、その様子を見て『彼』は笑った。

「ハッ、死ねオラァ！」

蛇は同時に衝撃はとなって私に直撃し、この体を吹き飛ばした。
息ができず聖堂最深部の壁へと直撃して、私は息とともに衝撃で傷ついた内臓の血を吐きだした。

そのまま地面へと崩れ、それでも私は前を見る。
ゆっくりとこちらへと向かう『彼』の表情は、思うようにいかずイライラしている子供のようにも見えます。
私はその姿を見て小さく笑う。初めてそんな姿を見れたことが、ようやく『彼』の『真実』の一部を見えたような気がしたからです。

「何笑ってんだお前？」

倒れる私を、踏みつけるように蹴り飛ばす。

「なあハザマちゃん？　俺はお前が少しでも存在できるように尊重してやってんだ」

再度、私の体を蹴る。

「何しろハザマっていう魂が存在したのは今回が初めてだ。そして、お前が居れば何かが変わる。この繰り返すくだらねぇ世界の輪廻が壊れるかもしれねぇだろ？」

言いながらも、蹴られ続け、私は再度血を吐きだした。
呼吸をしようとしても蹴られるたびにそれが肺から放出され、抜けていくようにも感じる。

「だってんのに何でお前は飄々としてやがる？　珍しく俺が尊重してんだぜ？　その態度は気に入らねぇんだよ！」

胸倉をつかまれ、私は無理やりに彼の顔と対面しました。
髪は逆立ち、血管が浮き出るほど、『彼』は頭にきているようです。
その状態に私は、深く考えることはありませんでした。
すでに『彼』の頭は戦闘から拷問へと切り替えられ、私についてはボロ雑巾程度にしか考えていないでしょう？

「……ここ、私の精神世界だってしってます？」

「あぁ！！？」

私の発言に怒鳴り返されました。
キレやすいのは直したほうがいいんじゃないですか？　牛乳でも飲んで。

「だから私は大抵のことは再現できるんですよね」

「それでこの様か。『人形』様は言う事が違うなおい」

む、先ほどの私の言葉の当て付けですか。いわれると結構悔しいです。

ふむふむ、……境界には相変わらず接続され続けているようですね……。

「ですから、知識さえあればどんなことでも再現できるんです」

「……続けろ」

ええ、夢の中で自由に空を飛べることを夢想する人もいるでしょう。
ですが、その状態に至るまでの手順を理解しているとするなら、どうでしょうか？

自転車の乗り方がわかれば、夢の中だって自転車に乗れます。
料理の手順が分かれば、夢の中だって料理ができます。
そして……

「その再現には例外はあまり無いと私は思うんですよ。それに、この距離なら丁度いいでしょう」

次元干渉虚数方陣は既に展開されている。
『彼』が私を覚醒させるために展開したのだから、彼も覚えているだろう。

「例外はないというのは……たとえばそれが……『最強の魔導書』であったとしても、です」

「！！！！　オイまさか」

その為の知識は既に境界を通して『彼』から私へと流れ込んでいる。
それは、少し前から現れた『死神』と呼ばれるようになった男の存在。
そして『死神』が武器として振るう、その魔導書。その製作者であ

る『彼』からは、その手順と術式の方程式さえも私の中に入り込んでいました。
そして蒼とその力を行使するために媒介にする中間地点は、私（ここ）に存在する。

「ッチィ！！」

「遅いですよ」

拘束機関も存在しない。おそらく私が展開できる術式は『模造品の模造品』に過ぎないかもしれません。
ですが、その力を今だけ、使うことができるとするなら、私は使いましょう。

「術式構成完了。　蒼の魔導書（ブレイブルー）、起動！！」

触媒はこの体。この体を中継地点として境界に存在する『蒼』を動力へと変え、私の目の前へと存在させた。
急いで離れようとした『彼』の体を拘束したのは、紅い腕だった。
私の肩から先に出現した、闇と魔素の塊で構成された腕は、鷲掴み

にして『彼』という存在を吸収する。

『ソウルイーター』

本来蒼の魔導書が持つべきはずだった窯としての機能ではなく、付加効果として存在する機能。
私のコレは元々も何も無く、蒼を使い黒き獣のように魂を喰らうだけの術式です。

あたりに赤黒い魔素が充満する。それでもぼんやりと見えていたはずの部屋の光景は既に存在せず、辺りには赤黒い魔素と蒼だけが存在した。

「あ、がが……ぎぎ……」

「く……そが。俺の魂を喰らい尽くす気か！」

蒼の存在とともにあふれ出てくる知識に、私の意識はオーバーヒートしそうになりました。

薄暗いはずだった視界は既に紅に染まり、体は今にも崩れそうなほどの魔素が体内へと入り込んでいます。
喰らう魂の恩恵で私の体はだんだんと傷が回復していきます。
ですが完治してもなお喰らい尽くせないほど、『彼』の魂は強靭でした。

「ハッ、ひょっとしてマゾか！？　たかが『人形』ごときに食い尽

くされるほど、俺の魂は脆弱じゃねぇんだよ！！」

それは知っている。
『彼』は私とは違う。長く生きれば生きるほど、その存在が持つ魂は大きくなる。
『彼』の魂はたかが七年程度しか生きていない私と比べるまでも無い。

さあ、ここからは賭けです。
『人形』が、その存在を『真実』へと変える為の最後の賭け。

「次元干渉虚数方陣術式解除ォ！！！！！」

私は自ら、蒼を行使するために必要な境界との接続を切りました。
徐々に元に戻っていく私の腕、それを見て『彼』は口元を吊り上げると、動作を起すために、体へと力を入れたようです。

たとえば、子供の貯金箱を見ましょう。
入っている額も少なく、一度部屋へと侵入してしまえば誰でも取ることができます。

ですがもしもその貯金箱に大金が入っていたとしたら？
簡単に手が伸びるようなところには置いておきません。頑丈な金庫

の中に突っ込んどくのが正解です。
これは全てに共通して言えます。
そして……

「第６６６拘束封印術式発動！！」

放置すれば全ての魂を食らう最強の魔導書、それを『拘束』するための封印術式なら。

そして、蒼の魔導書の力で削ぎ落とされた今の『彼』の魂ならば。

再び私の腕を中心に魔方陣が広がりました。展開と同時に召喚されたのは無数の鎖でした。私の体、特に『彼』を拘束する腕を中心に蛇を模した鎖が絡みついています。

同時に私の意識も削られていくように感じました。
本来私が知り得ることができないはずの術式、適性があるかどうかも理解せず、私はただ目的のためにこの術式を発動しました。
当然、その対価として私の意識は削られ、拘束しきれるかもわかりません。

そこまで考えて私は口元で小さく笑いました。
今まで知らない分からないの連続で、突如『彼』のせいで全てを知ってしまった。一つぐらい分からないものがあったっていいじゃないですか。

「ハァァァァザァァァァァマァァァァ！！！！！！」

彼が吼えた。

その体は徐々に崩れ、私の腕へと溶け込まれていく。
精神世界だからでしょう、光の欠片が宙へとこぼれ、私の腕へと模様を描いていく。

蒼と魔素で作られた紅い腕の一部が砕け、『彼』の自由になった右手のナイフが、私の喉元へと向かっています。
しかしそのナイフが私の喉へと届くことはなく、指も手も光の粒子となったその腕からナイフだけが、カランと音を立てて地面に落ちました。

その紋様がイメージさせるのは鎖。突如描かれたそれは、鈍く赤い光を放ち、『彼』を吸い込んでいるようにも見えました。

紅い腕は砕け、残った私の腕は『彼』の喉元を掴んでいます。
成す術は存在せず、粒子となって腕の文様へと吸収されていく『彼』は、最後に私を見て口元を吊り上げました。

「ははははははははははははは！！！！いいぜ、今回は拘束されてやる！　だがな、俺は消えたわけじゃねえ。『次』に、俺は必ずお前の躰を使わせてもらう！」

「でき…れば！　……ご遠慮しておきたいところですよね？」

あーだめですね、これ意識とんだかもしれません。

彼の姿が消え、静粛だけが残った聖堂に、私は再び倒れこみました。

精神世界ですから、肉体には特に負荷は無いと思いたいんですが……

あーそういえば私諜報任務の最中じゃないですか。それにマコトさんが……

その思考を最後に、今度こそ私の意識は完璧に落ちてしまいました。

すてーじふぁいなる（後書き）

いろいろな場所の伏線、タイトル回収完了。

シリアスも次回で終了。更新頻度ももとに戻ります。

…戦闘シーンは苦手ですね、うん。

すてーじえくすとら（前書き）

改訂以前のプロットだったらとっくに物語は本編に突入しているはずなのに……

すてーじえくすとら

一杯のコップには二杯の水は入りません。たとえ入れたとしても、満杯になったコップからは溢れ出し、残りは床へと零れるだけです。ですが絶対に一杯のコップへ二杯の水を入れなければならないならば、その水を零しながらも入れ続ける必要があります。そして零れた水は何処へと行くのでしょうか。恐らく雑巾で拭かれて、太源へと戻るのが関の山ではないでしょうか？

では、水を零さずにそのまま保つにはどうすればいいのでしょうか。簡単です。コップを、もしくはその代用品を用意すればいい。

と、『彼』はそんなふうにしてここに存在しています。私にとってどうでもいい話です……と言えたらどんなに楽だったのでしょう。しかし、これも運命というなら、受け入れなければならないのかもしれませんね。

なんて、カッコイイ事を言ってシリアスに始めようとするハザマです。

「だってそんなことでも考えてないと気がぶれてどっか吹っ飛んじゃうじゃないですかもー！！！！！！」

『ぎゃはははははは！　ほら走れ走れさっさと走れ！　早く逃げねぇと魔獣の餌になんぞ！』

騒がしい右手からの声を睨みつけると、私は担いでいない首の左側から後ろを確認しました。

追ってくる魔獣、魔獣、魔獣、魔獣、×2占めて8匹。魔素によって黒く染まった毛並をなびかせる姿はカッコいいとも思えますが、尋常じゃない量の涎を垂らしながら走る様はちょっとしたホラーです。

ナイフを投合、壁に突き刺し錬金によって頑丈にした糸を収縮の繰り返し。相変わらずの疑似ウロボロスは便利すぎます。そして競争する相手が忍者に続いて魔獣というのがいやすぎます。

ウロボロス？　いや私が仕えたのは精神世界の中の話ですから。使えなくもないですが、体力とかがごっそり持ってかれます。

それに、私を含めた『二人』を運ぶのに体力がなくなったら多分追いつかれると思いますから。

「……」

私の右肩に俵のように担がれているのは、気絶したマコトさんです。応急手当てをしたとは言っても所詮は応急ですね。さっさと見せないと肌に傷が残るかもしれません。

と、そんな状況に陥ってしまったのは自業自得ですけどね。私も上司ですから。部下の尻拭いも仕事の内ですよ。……部下でもなんでもない『彼』の尻拭いは完全にボランティアですけどね……。

「あああああああ！！　久々の任務は久々にクソッタレですよもう！」

月明かりが微妙に見えるスライド式の扉に向かって、私はナイフを投げつけ糸を収縮しました。

ーーーーーーーーーーーーーーーーーー

『彼』を拘束し沈んでいった意識は、失った瞬間に元の世界へと浮上しました。
ゆっくり眼を開き見えたのは、喉を切り裂かれ絶命している異形の狼たちです。私の片手には魔素で汚染された血が大量に付着しているあたり、私、もとい『彼』がやった惨状であることは簡単に理解できます。
研究所の廊下、位置は……実験場近く？　一発やってきたばかりということですか？

「……なんでしょうこのデジャヴュ」

具体的に言いますとイカルガでお城の中に潜入した時。敵陣で気を失って数分経ったあと、大量の忍者さんたちと追いかけっこが始ま

っていました。
彼が好き勝手やった後の尻拭いは殆ど私がやっています。……え？
今回も？

「いやいやいやいや、大丈夫ですよ今回は。ほら、魔獣も打ち止めじゃないですか」

考えたことを否定するように頭を振っていると、視界にクリーニングに出さなければならないほど汚れた私のスーツが視界に入ります。とりあえず身体に纏わり付いた『黒い血』を軽く払い落とし、油でギトギトになったナイフをハンカチで拭いました。
……気持ち悪いです。タールでも頭から被ったような感触に、気持ち悪い以外の言葉が有ったら教えてください。

ああもう、これも彼のせいですか。どれだけ私を虐めたら気が済むんですか。

『そいつは悪かったな』

「ひょえっ！？」

頭の中へと急に響く声。
音質の悪い器材で録音したかのような私の声が、私の右側から聞こえました。

「あーなんと言いますか……夢じゃないんですよねぇ……なにやってるんです貴方？」

『お前がそいつを言うのかハザマちゃんよ？』

私が声が聞こえた方向、右腕を見ますと、手の甲には頭に口が付き蛇を模した鎖、ウロボロスの入れ墨あり、その紋様は手の甲から肩へ向かって鎖が何かを縛っているようにも見えます。
夢と言うにはリアル過ぎる精神世界で封印しました彼の声が、右腕から聞こえていということは、つまりそういうことなんでしょう。

「……封印しきれませんでしたか」

『糞が、成功してんだろうが。でなかったら俺がこんな状態に甘んじてると思ってんのか？』

思えませんよ、そう答えて私はめくっていた右腕を戻し、黒い血だらけの壁へと寄り掛かりました。
精神世界での出来事であったのに、身体が鉛でも付けられたかのような重さが圧し掛かっていました。身体に纏わりつく『黒い血』が生暖かく、落ち着くには聊か不便です。
無事に『私』が世界（ここ）に居る。消えずに存在することができる。これが分かっただけでも有り難かったんです。
ゆっくりと手の甲を仰ぎ見て、紋様を見ました。

『彼』は『私』を消そうとした。そう考えるには些か誤謬があり、『私』と『彼』が一つに成ることは、決して消えるわけではありません。
『私』は『彼』として生き続け、『彼』が『彼』として生きるだけ。そうなっても問題ないとは思ってはいました。

ただ『彼』が私の『真実』を消そうとしたから、『私』は『彼』を否定したのでしょう。

――!?

『ああ、なんだよ。まだお前が此処でのんびりしてんのは、諦めたからだと思ってたんだがな』

頭の声が響くよりも先に私は立ち上がり、私は足を研究所の実験場へと向けました。
精神世界から帰ってきて、混乱していたことから私は失念していたのです。

この場所は何処で、何を目的として訪れ、現在どのような状況なのか。

『さっさとしろよ？　でないと……お前が守りたかったはずの『真

実』がぶっ壊れちまうかもしんねぇな！　ぎゃっはははははは
は！！！』

ーーーーーーーーーーーーーーーーーー

「ウコキャッ！！！」

液体状になった、黒い獣たちの集合体の顔面へと拳で殴りつける。
顔部分に装着された髑髏の仮面が割れる音が聞こえ、私は拳についた『黒い血』を振り払った。

私の数メートル後ろには、被験者であった私が助けるべき人たちがいる。

魔素で汚染されたのだろうか、三人とも髪の色は黒く、私の事を尋ねた一人以外は眼が虚ろで焦点が合っていない。
早く助け出して治療を受けなければ危ういのは間違いない。幸いなことにここの警備はザルにもほどがある。いくら三人連れ出すといっても、片手さえ空いていれば助け出せるほどだと、自分の実力と摺合せそう判断できた。

「もう、早く助け出さなきゃならないのに、嫌になっちゃうよ」

乾いた口の端を舌で舐め、再生された仮面からこちらを覗く目の前の黒い獣に小さくため息をつく。

その黒いスライム状の獣は、命の集合体と言っても差し控えが無いようにも感じる。

最初は人間からあの黒い獣へと変わったはずだが、その躰からは多数の魔獣の爪や牙、他にも槍のように鋭利な骨など、以前食った生物達の命の欠片を攻撃手段としているのだろう。

その体積は私が攻撃するたびに減っていき、それは命の燃料を零しているようにも見える。

一分と少し経ったけど、目の前の黒い獣を倒すにはあと十数秒かかるだろう。

肩を軽く回して私は起き上がろうとしている黒い獣へ向かって駆けた。

『世界の智が満ちることなんて無い』

小さな声が辺りに響く。

後ろの女の子の声だと認識したから、戦闘には関係ないとそれを無視する。

私を補足した黒い獣は無数の牙と爪を飛び道具として放ってきた。

しかし速度も銃弾より遅く、威力さえも高くないそれらを、私は最低限トンファーで弾き、さらに黒い獣へと肉薄した。

『躰に蓄積されるのは叡智だけじゃない。存在っていうのはすべてが智だった』

身体の中で気を練り、右の拳へと集中させる。
柔らかい体に点で殴ったとしても、殆ど効果が無い。衝撃が加わりやすい固い場所を見つける必要がある。

だけど、そんなことは関係ない。それなら面で殴りつけるけだ。
にぃ、と。口元だけでその黒い獣に向かって私は笑った

『だから――なきゃならない。『蒼』へとたどり着かなきゃいけない。だから……』

着地し、とびかかる黒い獣を完全にとらえた。
腹が開き見えた、人体の背骨と胸骨で造られた口へと向かって、弓の弦を弾くかのように拳を後ろへと下げた。

こいつを、この黒い獣を倒せばあの被験者たちは助かる。

「燃え上がれ！　私の魂（ソウル）！！」

限界まで引き下げた拳を、踏み込みと当時に気を全て乗せて前に振りかぶった。

「これが、青春の一撃だァーッ！」

放出された体中の気は拳の形となって黒い獣へと襲い掛かった。背骨と胸骨で作られた口はまず砕け、それでも止まらない勢いのまま、実験所の壁へと衝突する。

気は衝突してもまだ止まらなかった。鋼鉄でできた壁を突き破ると、もともとあったらしき壁の奥の空間へと吸い込まれる。ただ、割れてその場に落ちた髑髏の仮面、穴が開いた壁を中心に試算した黒い血が、黒い獣は完全に擦り潰したことを現していた。

それでも私は拳を下すことができなかった。理由は、私が砕いた壁の奥に居たそれが問題だった。

「……魔獣？　そっか、そういえばさっきの黒い奴が食ったのはこいつらだったんだ」

この研究所はもとより人工的な魔獣の製作といった、魔獣に対する研究機関だったはずだ。
だったら、私の眼前に見える黒く魔素に染まった魔獣の存在も頷ける。

私が確認できたのは、暗闇の奥にぎらぎらと光る眼。それほど多い数ではなく、多くて五匹程度だと私は軽く息をついた。
魔素に染められた黒い獣たちは、こちらを威嚇するように喉を鳴らしている。

数はほんの数匹だ。多少魔素に汚染されている存在とはいえ、自分が勝てない道理は全くない。

それよりも心配だったのは被験者たちが、恐慌状態に陥ってしまう事。だけど息の音さえも少なく、それほど静かならその心配も無――――

「え？」

私の、良すぎた耳が、たった『一人』ぶんの呼吸音しか聞こえない事を聞き分けた。

だから、私は後ろを向いてしまった。

『だから食う、食う、食う！！　智のために！　蒼のために！　わた　のか　だを治　ために！　くけけ！！！！！』

そしてその姿を視界に入れた。

どこか音が遠くに聞こえ、カラーだったはずの世界がモノクロに変わった。

被験者で、私が助けるはずだった子供達は三人とも居なかった。
千切れた片足が遠くに見える。狂ったように叫んだその黒い人型のナニカは、よく見れば背格好が少し前に見ていた被験者に似ている。

人間が身体の半分だけ酸で溶かされたように私は思え、顔の部分はどろどろの黒い液状となって滴を造り、頭部の骨を滴っている。
魔素で真っ黒に染まった髪のようなものが地面へと流れ、人型の口を位置する場所からは、さっき見た被験者の顔が半分だけこちらに見えていて、やがて咀嚼されていた。

「あ……あぁ……！」

その光景が意味するものを私は理解しようとはしなかった。いや、したくなかったのだと思う。
助けられると思った、助けたいと思った。そのはずの被験者達は既にこの研究所の狂気の手に掛けられていて、助けることなんて不可能だった。

自分に酔っていたのか。本当に私は助けられるとでも思っていたのか？　ヒーローへの願望でも持っていたのではないか？

えぐるような声が、私の中から聞こえてきた。先ほど黒い獣に食われた子供の目が、まるで私を責めているような声を思い浮かべさせた。

混乱状態だった私は、威嚇するように喉を鳴らしていた魔獣たちの存在も忘れ、その黒い人型を見ていた。
そしてそれを見計らったように飛び込んできた魔獣が、私の腹部へと突進して、私はその衝撃をうけきることさえもしていなかった。

「――がッッ！？」

まともに受けた腹部への衝撃を殺し切れず、私は数メートルも吹き飛んで頭を強打していた。
天井に見えるガラスと、警告音を鳴らす周りの赤いランプが火の玉のように見え、やがて起き上がろうとした視界に魔獣と黒い人型が入り込んだ。

「ひっ！？」

力が、入らない。
立ち上がろうとして力を入れた手が動かず、がくんと体が沈んだ。
いくら術式が作られたといっても、特定量の衝撃を食らえば脳震盪

も起きるのだろう。
脳震盪の特徴である意識喪失。ほんの数秒であるはずの混乱によって立ち上がる、という手段を失った私は、状況の整理を頭の中で完結することができず、ただ小さい悲鳴を上げることしかできなかった。

視界に入りこんできたのは一匹の魔獣だった。
文字通り、餓えた獣が私に覆い被さるように接近し、私の喉元へと食らいついた。
噛みつかれる寸でのところで右腕を前にだし、トンファーが獣の牙が私の腕を引き千切ることだけは防げた。それでも無意識的な行動に術式で強化する暇もなく、下顎の牙が私の腕に突き刺さっている痛みはリアルに感じていた。

（……死…ぬ？）

どこかその事実が遠いところのように聞こえる。
腕に食らいつく獣の牙が深く突き刺さり、さらに痛みは現実となり此処にある。
次に感じたのは足の焼けるような痛みだった。視界にはもはや人の形を失いどろどろの黒い塊が足に覆い被さり、足を溶かしているようだった。

どうしてだろう。死ぬ、という事実はここまで景色をスローに見せるものなのだろうか。
死ぬ前に見せる走馬灯とは、脳が生き残るための手段を過去の中から探すために起こる現象らしい。

だけど私に見せた景色は、今／現実ではなく、とても明るいものだった。
学生時代、ノエルやツバキと一緒に生徒会室で談笑していたシーン、私への侮蔑を向けていた生徒に対して凛とした態度で答えたツバキの姿、私の尻尾に向かってキラキラとした瞳を寄せるノエル、そんな私たちを見て苦笑するキサラギ先輩とカルルくん。
そして最後に見えたのが…………
「ウロボロス！」
ダークグレーのスーツに『真っ白』な髪を帽子で隠した、ハザマさんの姿だった。
――――――――――――――――――――――――
駆け出し、おそらくマコトさんが飛び込んでしまったであろう部屋へとたどり着いたとき、それはすぐに私の視界に入っていました。
魔獣に襲われるマコトさんと、さらにとびかかろうとしている半分スライムな人間の姿、確認したのはそれだけですが、私が動くには

十分な理由でした。

術式を構成し、アークエネミー・ウロボロスを起動させ……その瞬間意識が飛ぶかと思いました。

それはおそらく一度に大量の魔素を体の中に蓄積したことから起きた魔素中毒の一種だったのかもしれません。

黒いスライムへとウロボロスが突き刺さり吹き飛んだのを確認した私は、すぐに鎖を縮小させゴムに引っ張られたボールのごとく接近しました。

そのさい張った障壁と合いあまって、魔獣数匹とぶつかり吹き飛んだのが分かりました。

接近したのはかなりの速度です。弾丸のごとく飛んで行った私の突進はかなりの衝撃になったのでしょう。

「……まずい、ですね」

辺りに群れる魔獣を散らし、マコトさんの状態を見た私の言葉がそれでした。

足などにある火傷……まるで酸で溶かされたかのような肌は、かなり出血していました。

私はポケットの中から緊急用の薬を取り出し、香水でも吹きかけるようにその薬を振りかけました。

緊急用止血と再生増強効果が含まれたそれに治療の術式を合わせて傷を治していきます。

イカルガ戦役の最前線で使われた薬、使用後の気を失うほどの激痛を伴うことを抜けば万能であるその薬と術式ならば、十分なほどの応急処置です。
数分あれば、傷痕一つ残らず復帰できるでしょう。

そう、数分必要です。

辺りには十匹弱程度の魔獣たちと、人型に形をとどめている黒いスライム。
治療する時間も無ければ、そんな暇もない。薬だけでは、応急処置が十分とは言い難いです。

正直に言えば、打つ手が在りません。

私が精神世界に居た頃のように自由に力を使いこなせれば話は別ですが、今の私はウロボロス一発出すだけでもかなりの疲労となります。
残る手段は……強行突破。

「（よう、苦労してんな。手を貸そうかハザマちゃん？）」

「……」

「（お前の術式構成はクソだ。蒼から流れ込んでいた知識をバック

にしねぇとウロボロス一発だって撃てやしねぇ。俺なら、こんな犬ッコロども苦労さえしねぇよ）」

「……対価は」

「（封印の解除、っつうのは虫が良するし、お前がやんねぇだろ？封印を一部解除しろ、それだけでお前を助けてやんよ。大量出血大サービスじゃねぇか）」

「……」

『彼』の言葉の意味を考えました。
彼を拘束した封印術式は、１つの綿密な術式ではなく、幾重もの封印が成されている術式です。よって一部を解除することは難しくありません。

ですが……『彼』の封印を解くということはどうでしょうか？

『彼』という存在について私は蒼からもたらされた知識によって『理解』しています。そして危険性についても……

思考したのは数秒、対峙していた魔獣を再度確認して、私は封印の一部を解除しました。
瞬間、流れ込んでくる思考。『私』という思考の横に『彼』という思考が出現し、両方が頭の中に存在しているように感じました。
同時に腕のウロボロスの刺青が鈍く翠色に輝き、鎖の頭の部分が消滅したようです。

「へえ、物分かりがいいな。ちっとだけ評価をあげてやんよハザマちゃん？」

「……はぁ、私は治療に専念します。逃げ切れますか？」

「動けるのは五分、ってところか？　そんだけあんなら全員ぶち殺すこともできる。お前は思考の一部を提供すりゃあいいんだよ」

はたからみれば奇妙な光景でしょう。一人の人間が全く違う口調で一人で話しているのですから。

脇にマコトさんを担ぎ、私は治療の術式を展開していきます。

それを最後に私は体のコントロールを失いました。

治療の術式は展開し続けています。ですが、身体を動かす、という機能については『彼』が全てを持ったようでした。

「さぁて、来いよクソ犬ども。俺がちょびっとだけ遊んでやんよ！」

――――――――――――

「なんて格好つけてたのはどこのどいつです！！？　何が全員ぶち殺すですか！？　なんで私がまた魔獣と徒競走しなきゃなんないんですか！？」

「（あぁ！？　お前が治療如きに思考を割り削ぎすぎなんだよヘタクソがッ！　ソフトがクソであそこまで戦えたことに感謝しろや！）」

なんやかんやで、冒頭数分前に戻りました。

かっこつけて私の体を動かす『彼』ここで重大なことが発覚。

『蒼』の力が　使　え　ま　せ　ん！

本来彼の知識では蒼からもたらす大量の力を使って相手を倒すというのが戦闘方法。ですが一部だけ封印を解除されていない彼が、蒼にアクセスすることすらできません。頼みの蒼の魔導書の後ろには（笑）とついてもいいでしょう。

あと治療中の私の残った思考回路では、ウロボロスすら展開できません。というか、したら情報の速さと量で頭の血管が吹き飛びます。幸い私の術式適正は素晴らしいです。体を強化して戦うには限界もあり、さらに見えたのはまだまだ沸いてくる魔獣の影。なるほど、これはもう逃げるしかありません。

幸い、マコトさんの治療は終了しました。本格的な治療をすれば、すぐ前線復帰もできるでしょう。いまだに私に担がれたままですけど！

私の移動手段であるナイフと糸の伸縮による移動、新しく手にした

ウロボロスとかなんの役にも立ちません。

「はぁ……あなたがこんなにも使えない人だとは思いませんでした」

「（そいつはお前にそっくりそのまま返してやんよハザマちゃん）」

どうやら『彼』という存在を封じ込めることはできるようです。それが確認できただけでも一安心といったところですか？

そしてここまでやってきた追いかけっこもようやく振り切れそうです。

壁につけられた赤く光るランプを見つけた瞬間、その下にあるスイッチを叩き壊しました。

そして私が通った瞬間、鋼鉄の壁が背後に落ち、魔獣たちが激突する音が聞こえました。

侵入者、災害、魔獣の脱走などの緊急用シャッターでしょう、回り道をすれば私のいるところに来れなくもありませんが、一息つけたところです。

それに、……私の目の前にはさんさんと輝く月の光が！

どうやら外へと続く扉へと戻ったようです。時計を見ればまだ集合時刻には余裕があります。

偵察任務も完了……というか、失敗ですけど、本来『彼』の体を定着させるという意味で見ても失敗です。なんか良いところが皆無な任務でした。

とはいえ、生き残れたには生き残れました。気分はマジヒャッハーです。私もはやく帰ろうと足を外へと向け……

「止まりなさい」

突きつけられたのは刀でした、あれ？コレドッキリですか？

本当にそう思ってしまったのも仕方ありません。

辺りに見えるのは数人単位の人々、どうやらここから逃げ出そうとした科学者もいたのかもしれません、ですがそんな白衣をきた方々は、気絶して簀巻きになって見張りをしている方の足元に転がっていました。

どうやら一小隊がこの場所に派遣され、待機状態であるということでしょうか？

「統制機構の者です。研究場関係者の拘束、拿捕を命じられています。抵抗は交戦意志があると見なし、強制拘束に移らせていただきます」

「ちょ、ちょちょちょっと待ってください！」

いやまあ確かに出てきた私は不審者ですよ？　黒いコートは魔獣の血でさらに真っ黒になって、肩には血だらけ埃だらけの女性が居て、外から見える右手には刺青まみれですし……。
しかし、この衛士は本当に統制機構の者ですか？
クリーム色に近い白に、顔も姿を見せないフードとコート。顔には白く眼の文様がつけられたお面があり、表情は見えませんが硬い女性の声であることは分かります。
もしも私がふざけたら実力行使で拘束されそうなのは眼に見えていますね。

そしてそんな状態が普通の制服な統制機構の部署といえば……

「……『審判の羽根』、統制機構第零師団の方でしたか」
「ご存知でしたか。では、その役目も知っているでしょう、ただちに……え？」

奇妙なところで言葉を切った零師団の衛士さんは、私の肩を見て少しだけ感情を出したように疑問符が言葉に表れました。
というか、えってなんですか？　こっちが驚きたいですよもう。

「……マコ…ト？」
「ひょえ？」

そのマスクの下からも風景、見えるんですね、と。私のどうでもいい疑問が吹き飛ぶほど、その仮面の下から漏れた単語は以外でした。

すてーじえくすとら（後書き）

初期プロットがほとんどにフェイズシフト1のシナリオと一致していたため、結構改訂しています。そのため、『彼』はこんな形でとどまりました。
キャラの強さにはいろいろ理由もあるので、のんびり考えたりして暇を潰してもらえれば幸いです。

ステージ1（前書き）

今回は完璧に繋ぎの話です。

ステージ1

それは、被験者で在った者のなれの果てだった。

その少女が居た研究所では、疑似的に作り出された『窯』によってもたらす人体への影響、知識のサルページを目的として研究を続けられた場所だった。

一部の部屋を覗きそこは『窯』の影響を少なからず受けることをコンセプトに建てられた、ハザマが知識を行き過ぎた研究者が知識を求めるために行く場所だった。

その研究所の実験場、ほんの数分前にハザマたちが居たその場所に一人の被験者がいる。

黒くタール状になった体は、その身体に歩合不相応な知識を身体に宿したことによる肉体の崩壊を常に続けている。

だがそれでも他者の肉を食らえば生き続けることができるだろう。

少女ともよべる年齢の顔面は、黒いタール状の液体となって床に斑点を作り出していた。

「……」

「……B地区実験場で要救助者を発見、応援を要請します」

クリーム色の服を纏い、白い仮面をつけた女の声。

それが聞こえたと同時に、その被験者は顔に人間の顔を作り出した。

擬態と捕食、後姿しか見えぬその衛士にとっては、無数にある魔獣

の死体の真ん中に居る、という事実以外は、ただの少女にしか見えなかっただろう。

数歩、衛士はその少女へと歩みを寄せる。それはその被験者にとっては、蜜におびき寄せられた虫と同じ。自身の糧でしかない。

少女との距離が数メートルといったところで、その被験者はぐちょりと音を立てて黒いタール状の物質へと変体した。

在り得ない角度に体をひねり、座った状態のまま衛士に向かって跳躍する。

人を溶かす酸、その被験者は蒼からあふれ出した知識でその物質を体に構成し、それを使い捕食してきた。

だから少なからず思っただろう、新しい肉が手に入る、しばらく生きることができる、と。

「おそらく貴女もなんの罪もない、むしろ擁護されるべき者なのでしょう」

斬、と、その被験者にとって最も近く限りなく遠くにその音は聞こえていた。

「貴女は私の親友（とも）を傷つけた。私の剣に恨みや怒りがあることは否定はしません」

鎮、と、脇差と呼ばれる短い刀が収められた音が背後から聞こえた。

「ですが……そうなってしまった者の先は在りません、命を喰らい散らせたその罪、私が引き受けましょう」

背後へと移動した標的に向かって、被験者は再度とびかかる、

と、同時に視界がズレた。

左から先が下へとズレはじめ、右の風景が横へと倒れる。

それは被験者の頭が下から切り上げられた脇差によって切り捨てられた結果だった。

落ちて消えゆく視界に、衛士の仮面が外れる。そこに存在した表情は苦々しく、また小さく息を吐いたところだった。

「……断罪完了」

小さく呟きその衛士は辺りの風景を見渡した。

辺り一面に広がるのはピクリとも動かない、魔獣たちの血まみれとなった死体。その実験場を研究員が見下ろせるはずだった上に位置する強化ガラスは、真新しい赤い血によって染められていた。

第零師団の他の団員がすでに行った結果だろうか、どちらにしてもその処理を行った者は体中が『真っ赤』な血に染まっているに違いはない。

「ハザマ大尉、ね」

先ほどすれ違った親友の上官を思い出す。
今回の任務では第零師団の制服へと、魔素への抗体素材を取り入れられている。『窯』の上に建てられたこの場所への対策である、最も、衛士たちは魔素が濃いとだけしか伝えられてはいなかったが。
そして、その多少とはいえ濃い魔素の中で活動していたその人物は……

「……悪い人でなければいいのだけど」

考えても詮無きことである。
衛士そう考えを纏めつつも警戒を続け、任務のための徘徊へと戻った。

―――――――――――――――――――――――――――

「はあ……鬱です」

こんにちは、統制機構諜報部のハザマさんです。

現在は統制機構技術開発部へと向かう通路を歩いている最中です。
その私の視線は通路ではなく、身だしなみ用の手鏡へと向けられていました。

「……ストレスですね。ええ、特にこの呪われてる右腕のせいでしょうか」

「（今回は何の関知もしたつもりはねぇぞ？）」

直接的には、ですけどね。
辺りにはもちろん人がいるため、小声で彼へと答え、再度手鏡へと視線を下しました。

鏡に映っているのははい、真っ白な私の髪。びっくりです。

ハゲていないだけまだマシでしょう。統制機構でも多くの中間管理職のプライドを打ち破ってきた脱毛という現象は、どうやらこの体には発生しなかったようです。
その結果は真っ白な髪、いや、まあいいんですよ。イメージチェンジにも心の切り替えにもなります。
ただ……マコトさんには大爆笑されてしまうのではないでしょうか？　しばらくその心配もありませんけど。

任務帰還から二日、私のお仕事は大量の報告書の山でした。マコトさんの命令違反、というか失敗はどうやらキッチリ上に伝わっていたらしく、書いても書いても終わらない始末書には久々に泣きたくなりますね。
マコトさんは未だ意識不明の軽傷。頭を打った可能性があるためし

ばらく様子見をしながら復帰すると第三師団の方から連絡がありました。余裕ができたらお見舞いにでも行きましょう。

「そしてレリウス大佐からの追い討ちですか……何を言われるのでしょうか」

そして時間が取れたのを見計らったようにレリウスさんから呼び出しを食らいました。
ため息をつきつつも足はレリウスさんの研究室へと向かい、中間管理職という私の頭の低い立場では、身だしなみの鏡をしまって扉をノックしたのも必然です。
部屋に近づくたびに彼の言葉数は少なくなりました。まあ……自分ともあろう者が私に封印されたことを馬鹿にされるのがいやだったのでしょう。

「失礼します、レリウス・クローバー大佐、諜報部諜報官大尉ハザ

「入れ」……了解です」

ノックして言葉をかける最中許可されたことに少し驚きつつも、部屋へと入りました。
部屋の内装は……とにかくメカメカしいです。右も左も天井まで機械だらけという、さすが技術開発部の大佐といったところでしょう。
筒状のケースの中に入れられた人形を機械端末で操作しながら、その顔がこちらへと向けられました
……まだその仮面舞踏会でも居そうなマスクしてたんですね、とい

うごく私的な言葉を飲み込み、私はレリウスさんの言葉を待ちました。

「……成程な、消えずにお前の方へとその躰は渡ったか、ハザマ」

……なんか一目見て『私』であることを見抜きました。あれ、レリウスさんってエスパーか何かですか？

「本来ならその頭髪の色に変わりはなかった筈だが……、成程、肉体から生まれた魂がそのまま意識となって定着するとはな。相変わらずお前という存在は興味を引く」

「あの、もしもーし？」

「完璧では至らんか。ならば第十三素体が目覚めぬのも道理、か。ならば不安定因子を導入……だが水準が低ければ、覚醒まで至るスペックが無ければならないのも事実……」

どうしましょう、なんかレリウスさんがトリップしてる。
若い女性ならともかく、そのへんに居る怪しいおっさんがそれをやっても気持ちが悪いだけです。
……撤回しましょう、妄想癖なんてだれがやっても気持ち悪いです。
社会人としてそれはどうなんですかレリウス大佐。

「……なんだ、まだ居たのかハザマ」

「いやいやいや」

いやほんと社会人としてそれはどうなんですか！？　生まれて七歳半の私にそう思われるって何事ですか！
顔の目の前で手を振るう私、『窯』から入れられた知識はこの人についても主観混じりですが知ってます。
研究以外の事象は物として扱うような人だと私の知識のなかではあります。
……成程、お酒に誘っていつも私を放置して帰っていたのも納得です。支払いは任せろ、なんて言葉聞いたことありませんし。

「もう構わん、お前の姿を確認したかっただけだ」

なら貴方がが私のところに訪れてくださいよ！
機材端末へと視線を向けるレリウスさんの背中に、小さく毒を吐く……じゃなくて思いました。
毒を吐く？　階級がかなり離れている人にそれは無理です。一つ違うだけで諜報部以外ではものすごく扱いが違うんですから。

「正直、お前という存在が残るとは思わなかったのだがな」

「へ？」

「言葉の通りだ……奴に躰を奪われると、私はそう踏んでいた。だが、結果お前はその躰に存在する」

言葉を続けながらもレリウス大佐の手は止まっていません。まあさすがの人形師といったところですね。

レリウスさんの言葉については……思うところが無いわけではないですね。私の存在の有無に関わってますし。
ただ……どうでもいいと言うのですか？　ある程度絶望と呼べるのは『蒼』に触れたことで知識として入ってきてますし、そんなの一つの現実／真実には勝りませんし。
今更感が漂ってるんですよね、うん。

「……『彼』の事は聞かないのですか？」

「……奴がお前に『蒼』へと接触するように仕組んだ。その結果お前がそこに居るのならば、奴という存在については理解しているのだろう」

一応聞いておきますが、レリウスさんはそこまで興味を示していないようです。

「テルミは協力者だ、私は奴がどうなろうと……興味はない」

ぞくり、と、私は初めてレリウス大佐が怖いと思いました。

私はテルミさんは恐いです、蒼に触れ知識を得てさらに怖く感じています。獣兵衛さんとどっちが怖いと聞かれたらどっちも怖いと言うぐらい恐いです。
あの六英雄と同じくらい怖い……テルミさんって六英雄でしたっけ。信じられないほどの鬼畜外道ですけど。

まあそこまで怖いテルミさんをも道具のように言ってのけるレリウスさんに畏怖を感じたというのでしょうか。

その言葉を最後に今度こそ何も話さなくなったレリウスさん、私は一礼すると、なるべく音を立てぬようにその場を去りました。

あとで確認したらなぜかレリウス大佐の仕事の書類が私のデスクの上に運ばれていました。
ええ、私が『私』のままなのをいいことにパシらせる気満々でした。
『彼』は大爆笑してましたが私は泣きたくなりました。

さーて、書類との格闘を始めましょうか。

ステージ1（後書き）

最初に出た衛士の武器に関しては手元に資料が無いので完璧オリジナルです。

ステージ2（前書き）

お久しぶりです、そろそろ新しい情報が欲しいですね。
とはいえこの小説では設定はＣＳしか使いません。設定の差異が出た場合、ある程度は補正しますが、根幹にかかわるところまではご了承ください。

ステージ2

右、左、前、後ろ、上も下も真っ暗闇な空間。私はまるで月の無い夜のような場所に立っていた。
地に足が付いているのに、思考はふわふわと安定せず、ぼんやりとした頭は、なんとなくこの空間が夢の世界なのではないかと想像させる。
しばらくその暗闇を眺めると、徐々に風景が見えてきたのが分かった。

『（……？）』

見えてきたのは古めかしい木でできた扉、その細部には自分では理解できないような高度な術式をかけられている事が分かる。
その扉をまるで空気のようにすり抜け、私はその部屋の中へと入り込んだ。

敢えて言うならば古城の牢屋……に似ているような気がする。
大きく切られた長方形の石を、レンガのように積み重ねた周囲の壁が見え、さらに木でできた檻がその世界を隔てる結界みたい。
その部屋の一番奥には、壁を瀬にして座る人影があった。
壁へ吊り下げられるように両手は固定され、その上からは古い木材でできた杭を手の平へ打たれている。そこからはまるで打ったばかりと言うように血は流れ続けていた。
上半身は右半分の服が切り裂かれてるためか、肌が大きく露出されている。
そして見えたのは右腕に広がる『鎖の入れ墨』だった。腕に巻き付

くように入れられた毒々しい緑の入れ墨は、手の甲まで入れられていた。

『……ぁ？』

俯いていた顔が上げられ、その表情を見た。
逆立てられた緑の髪に、消えることの無い憎悪を宿した眼。
顔は死人のように青白く、だというのに死ぬ気配は微塵も感じさせなかった。

そして、その姿には全く見覚えは無いというのに、その体つきや顔の造形からは私の上司を印象付けた。

『（……ハザマ、さん？）』

確かに似ている。兄弟か何かだと言われれば信じてしまうほど似ていた。

それでも、間違える事など出来そうもない。

その人物を見たとき、改めて身体全体で恐怖を感じたような気がした。
以前報告に行ったときのハザマさんではない『誰か』。それによく似た雰囲気ではあるが、それ以上に気味が悪い。

『……んだテメェ。見てんじゃねぇよ、ぶち殺すぞ』

濁った眼は確かにこちらを捕え、そして……

その時点で、私の意識は浮上した。

――――――――――――――

こんにちは、仕事疲れ残りますハザマさんです。
現在は病院の病室で、椅子に座りながら林檎の皮を向いていました。
今だに目を覚まさないマコトさんのところにお見舞いに来たのですか、よくよく考えれば目が覚めてないのだからすることがありません。切っては食べての林檎は四個目になります。

「……まあー流石にそう上手く目を覚ますわけがありませんよね」

小さくため息をつきつつ、持ってきた書類に目を通します。
一部はマコトさんへ、もう何部かは私へと送られた書類です。
その中にはマコトさんの体調についての記録簿がありました。見れ

ば、悪いところは何もなく、もうすぐ目覚めてもおかしくは無いようです。

「ですけどまぁ……魔素中毒ですか」

再度ため息。
こうなった原因の研究所、『彼』の持っていた知識によりますと、人工的に造られた『窯』をさらに発展や応用を目的とされていた場所で、空間そのものが境界に極めて近い場所だったようなのです。あの場所では『知』という毒が魔素に含まれ、術式を使い身体に取り入れ過ぎれば取り返しの着かない状態になったかもしれません。幸いマコトさんは魔素に頼る事が少ないので、この程度ですが『審判の羽根』の方々は大丈夫でしょうか。
……まぁ大丈夫ですね。一応エリート部隊ですし、『テルミさん』が情報を送ったから『大丈夫』でしょう。……果てしなく不安です。

「早く起きてください、マコトさん？」

そんな情報を伝える訳にはいけませんけど、言わなければならない事は多数あります。それ以外でも『会話をしたい』という欲求がありますから。
『私』という存在には繋がりが有りません。有ると言ったらマコトさんと『彼』ぐらいなものです。寂しい人生にも程が有ります。依存しているのか、と言われても分かりませんが。普通にしているだけですし。
とは言え、マコトさんがもしもあの研究所で死んだら、と考えたとき、内臓を刺すような鈍い痛みが心臓にあったことは事実ですが。

私は軽く頭をふって思考を戻しました。
現実的な話ではありませんね。とりあえず後で『彼』と話でもしましょう。
マコトさんもさっきからうねりを上げている私のせいか、尻尾の保温で寝苦しそうですし、寝汗でも拭いてあげましょう。
近くの水道でタオルを濡らし、さあ拭こうとして……手が止まりました。

空調や自身の熱からか少しだけ赤くなった頬に、小さな玉になった汗は前髪を少しだけ濡らしています。
見方を少しだけ変えてしまえば、それは直前にシャワーを浴びたようにも見えなくありません。

それを見てつい一言、何気なく私は呟きました。

「……美味しそうですね」

そう、まるで剥いたばかりのゆで卵！　ほんのりと感じる蒸気にモチモチの肌！　あの美しさと一致します！
いやはや素晴らしいですね。まさかマコトさんがゆで卵の素質があったなんて！
思わずガッツポーズです。『彼』がゆで卵を美しいと見る理由が分かりますね、ええ。

「……ハザマ……さん？」

「ひょえっ！？」

と、そんな馬鹿な事を考えていたからかもしれません。
ガッツポーズから出戻り椅子に急いで座り直した私は、目を擦りながら身体を起こするマコトさんと対面しました。
何度か目を擦り、意識を覚醒させようとしているのでしょう。
あちこちを見渡し最後に私の一部分を見て、一言呟きました。

「……白？」

「そこには触れないで下さいお願いします」

完全に油断していました。
そう、何を隠そう今の私はレリウスさんの陰謀による白髪ヘアー。
急な意にも寄らないイメチェンに私は思わず頭を抱えたくなりました。心なしかマコトさんも若干引いているような気もしてきました。
（被害妄想）

「……もしかしてイメチェン？　うーん、ハザマさんは元が良いから似合わなくもないけど、スーツは変えた方が良くない？　赤とか」

「どこぞのブラッドエッジと同じセンスなんて嫌です！　いいから、頭には触れないで下さい！」

本の少しの静粛はマコトさんの言葉に破られ、私はいそいそと髪を帽子の中に隠しました。
そんな私の動作がおかしかったのでしょう。くすっとマコトさんに小さく笑われてしまい、思わず顔に血が昇ってしまったようです。ほら、カッコイイ上司で居たいんですよ、部下の前では。（完全に手遅れ）。なんか悔しいです。

「笑わないでくださいよ。全く、せっかく寝汗を拭こうと思っていたのに、そんな気も無くなりました」

「寝汗を拭く……？　はっ！？　なんてことだぁ！　ハザマさん私の身体に手を出すつもりだったんですね！？」

「寝汗を拭くの表現がおかしいですって！　１００％の善意です！」

「いいや、ハザマさん。前回私のお尻を揉むという変態的行動にでたでよね？　明らかに私の身体に興味があった事は確実でしょう！？」

「スゴイです、尾という言葉が足りないだけであっという間に私が変態に！？　」

「不潔だハザマさん！　私の尻尾には絶対に近づかないでよ！」

「まさかのモフり拒否だなんて……私はどうやってマコトさんの友情を確認すればいいのですか」

「男女の間に友情なんて成立しない……それでも進むと言うなら、それは修羅の道だよハザマ中尉！」

「大尉です！　そんな道理、私の無理でこじ開ける！　今の私は阿修羅すらも凌駕する存在であることをここに証明してみせましょう！！」

「……」

「……」

そういって私は両手で宙を揉むように構え、マコトさんは尻尾を隠す。

「くくっ」

「あはっ」

……ええ、やはりこれですね。こんな下らない会話がどうしようもなく楽しく感じます。

思わず手を挙げ二人でハイタッチ。寝起きのテンションですることではありませんが、マコトさんも勝手に剥いた林檎を摘む程度には回復したので良しとします。マコトさんのお見舞い品ですし。

「んぐっ…ん……ふぅ、おはようハザマさん」

「第一声か二声で言うべきですけどね、というかもう3時ですが。ついでに言うなら頬に林檎を詰め込まないで下さい。ツッコミ所満載ですけど、おはようございますマコトさん」

お互いに言ってる事が下らないと思ってはいますが、それをやめられません。

ああ、やっぱりこの空気は心地よい、そう思い私は口元で笑みを作りました。

――――――――――――――――

本当にくだらない、ですが楽しいと感じている私ですから、本来するべき話を放置してマコトさんとの談笑は続きました。
勿論いつまでも高いテンションでいるわけでは有りません。
たわいのない話を続けては居ましたが、私としてもその時間が『楽しい』と思っているのは事実です。ずっとこの時間が続いてほしいと思った程ですし。

だからこそ、『その』話題から避け、私から切り出すことはできませんでした。

「ん～流石はツバキ。いつ来てくれたか分からないケド、お見舞い品は一級ものだね！」

「現金ですねぇ……まあー確かに心配していたようですから、あとで連絡するといいですよ」

数日間とはいえ何も食べずに居たからでしょう。私が切り身を食べるの繰り返しをしながら話していましたが、不意にその手が止まりました。

「……あれ？　ハザマさんってツバキと面識あったの？」

「あー……はい。研究所の私達の後任が彼女の部隊でした」

研究所、という単語を言った瞬間、しんと当たりの空気が冷えたような気がしました。

一応、私としてもその話題は避けていたつもりでしたが……ええ、NGワードを踏んだようですね。

その時間は数秒だったでしょう。小さく息を吐いたマコトさんは、服装と姿勢を軽く直し、改めて私へと身体を対面させました。

……さて、私としても何時までもふざけているわけにもいきませんね。

「話、あるんですよね、ハザマ大尉」

「……ええ。命令通達と貴女自身の処分について少し」

処分、という単語にマコトさんは少しだけ顔を強張らせました。自身が何をして、そこにはどのような責任があるのかは多少の理解は有るのでしょう。

私は鞄の中から封筒をを取り出し、中の書類をマコトさんへ手渡しました。

「結果から言えば任務は失敗です。ですが本来行われる筈だった後続の部隊によって施設は押さえられました。人的被害はありません」

誰が指示したか調べたところ、な　ぜ　か！　審判の羽根を動かしたのは私ということになっていました。

勝手に名前を使われるとか物凄い迷惑ですよね。私の名前が独り立ちしたりしませんよね……。

「まあ任務の失敗という点は私の責任です。故に考慮しません。ですが命令違反という点においては、流石の私も無かったことにするわけにはいきませんね」

「……はい」

「ナナヤ少尉には二週間の謹慎を、私には山のような始末書が渡されました。今回の件で理解したことも多いでしょう。その体験をまとめ私に反省文でも出してください。

他に聞きたいことは？」

淡々とした口調で話しては居ますが、心配だったことも事実です。被験者達は……同情はしますがマコトさんが無事だったことを喜ぶのが先ですし。

ですが何が失敗の原因だったのか、それさえ理解してくれれば私としては謹慎期間は無くても良いぐらいなんですが。まあー一応内外に見せるけじめは必要ですから。

マコトさんはしばらく押し黙り、じっと何かを思案しているように見えます。

数秒たち、ようやく口を開き私はホッと息を吐こうとして……

「……得に質問はありません。今回は私の力不足で手数かけてしまい、申し訳ありませんでした」

――――どこか、その言葉が引っ掛かり、息が詰まりました。

「いえいえ、マコトさんの力量は十分なものです。ですが今回は行動が悪かっただけですから。次回に生かしてください」

そういった私の言葉には返答がありません。
表情にも出しているように、慰めようという気持ちが大半を占めているはずです。

ですがどこかに、違和感を感じました。

ギュッと握り締められた毛布へと、俯かれた視線は私と重なることはなく、どこか私の中で引っ掛かり続けています。

「だけど、もし私にもっと力があれば、あの場で救い出せたかもしれません」

「違いますよ、全然違います。私はあの行動自体が間違いだと言いたいんです」

言葉に僅かな苛立ちが混じりました。
言っても理解してもらえていない事に対する事と、……あと何かに私は苛立っているようです。

マコトさんと私の視線が再び重なりました。
ただ疑問を投げかけるにしては険があり、反抗するにしては落ち着いた表情で、マコトさんは再度口を開きました。

「あの時、被験者を『救い出す』という行為は、本当に間違っていたことですか」

「ええ。諜報活動に『救い』は必要有りません。その『救いが無い』状況を伝えるのが私達の仕事です。あの程度なら放っておいても問題ありませんでした」

「！？　ですがッ！？　……自分の力で救う事ができるかも知れないなら、その手を掴む事はいけないのですか！？」

「……くどいですねぇ」

深く帽子を押さえるように被り直し、私は大きくため息を吐きました。

親米によくある話です。衛士と諜報官の違いを分かっていないということは。

私は今回の失敗の事を抜いたとしても、私の意見が変わることは無いでしょう。

見ず知らずの人のために命を懸けられるほどの思いも無ければ、そうするつもりもありません。

ですがマコトさんが助けようと命を懸けてしまうなら、私が懸けないわけにはいきません。

……ああそうですね、今気がつきました。

「マコト少尉、貴女諜報部辞めた方がいいですよ」

私は、この人に死んで欲しくはありません。

考えてみれば簡単なことです。
私がわざわざ深追いした彼女を追い掛け、『彼』の封印を一部解いてまで、私は彼女を助けようとしました。
自分が無くなる、その可能性は完璧には消えず、魔獣に食い殺されそうになっても、私は助けようとした。

「諜報官の情報で衛士が動き、衛士が人命を救うものです。目先に捕われれば多くの人を殺すでしょう」

私の『偽物』だった世界を『本当』にしてくれたから。それだけではありません。
彼女と私との『思い』や『絆』というのでしょうか？　それは確かに本当であり、それが壊れて欲しくないから。だから私は要らぬ危険を犯す彼女にいらついていたのかも知れません。

「なのに貴女はその手を取る？　ハッキリ言うなら迷惑なんですよ、そういうの」

ただ、マコト・ナナヤという人間『らしく』居て欲しいと思う気持ちも真実なのです。
それは『私』を自覚した時から変わることはありませんから。

そう、その『らしさ』がこの諜報部という場所にいて無くなるのなら、死ぬ率が上がるのなら、咎追いなどで生きても酔いのではないでしょうか。

そのことを伝えようと、帽子を押さえていた手を離し、私はマコトさんと視線を合わせました。

「言っておくなら、今回の件で私は貴女に失望……」

したわけではありません

そう続く筈だった言葉は、その表情を見た瞬間に、宙へと消えていました。

悲痛な表情を浮かべるその目には涙が溜まり、やがて大きな水滴となって毛布に多くの斑点を作り出しています。

毛布を握る手は白くなるほど堅く締められていました。

涙を流すという行為、泣くということ。

では何故？　なんの結果その動作を彼女はしている？

「っ！」

それがどういう状態か理解してしまった瞬間、私は言葉を発することすら忘れ、息を呑んでいました。
彼女を泣かせたのは間違いなく私でしょう。ですが私はなに一つ間違った事を言ったわけではありません。

だと言うのに、まるで心臓は杭でも打たれたかのように痛み、私は思わず帽子を押さえて視線を隠しました。
何かを言うべきなのでしょう。ですが、上司という立場である私は、安易な言葉をかけるわけにもいきません。
口を開く、何かを言わなければならない。そうして私の口から言葉はこぼれました。

「……言うべきことは全て言いました。私はこれで失礼しておきます、ナナヤ少尉」

嘘です。
言わなければならないことはまだ有るはずです。
ですが、一秒でも早く、私は彼女の姿を見ていたくありませんでしたから。
それは嫌悪から発生したことではなく、もしかしたら私にとって初めての恐怖心だったのかもしれません。

怖い、誰かとの繋がりが消えることが。まったく、私としても女々しいことだとは自覚しているはずのですが。

だから私は逃げました。
『彼』というフィルターを挟んでいたとはいえ、『私』の価値観と為りうる思いは、その行為をすることを否定していたとしても。

「……あー、思ったよりもきっついなぁ……」

ハザマさんが部屋を出てから数分後、起こしていた体をベッドに倒した私は、袖を目元に当ててそう呟いた。
微妙に声は掠れ、目に当てた袖は濡れていた。思ったよりも私という奴は泣き虫だったのかもしれない。
怒られること、それ以上に信頼を失うこと、理解しているつもりだったのに、精神的な負担は大きかったみたいだ。

研究所での命令違反……これを後悔したかと聞かれれば、今の状況を考えても後悔するのは必然だし、逆に犠牲者は成す術なく死んでもよかったのか、と聞かれても、私は否定するだろう。
どっちつかずな状態で、答えは見えないままだった。

分かっていたはず。自分がどういう行動を取り、その結果がどうなるか、ということを。

『私は貴女に失望しました』

そう続くはずだった言葉が私の中で反響して、言いようのない痛みに襲われたような気がする。
言い切られても私は何の文句も言えず、むしろ言わなかったハザマさんが甘すぎるのではないか。

それでも、友人として見ていたはずの人からの信頼を失う、それは今の私にとってはひどく辛いものに感じた。

「やっぱりきっついなぁ……」

小さくもう一度呟いた言葉は宙に消え、私は自分自身に対して溜息を吐いていた。

――――――――――――――――――――――――

うぜぇ。

「死にたいですね、うん」

本当にうぜぇマジうぜぇ。

「ああ、もうちょっと言い方があったじゃないですかもう！　やってしまいました……死にたいです」

本当にうぜぇ。俺にどうしろってんだ。

机に突っ伏したまま呪詛のように愚痴を言い続けるハザマに、俺は遠慮することなく舌打ちをする。
先ほど病院から戻り自分の執務室に戻った瞬間、急に溜息を吐いたハザマは、俺の言葉を無視して愚痴を続ける。いや、イラつく発言ばかりを繰り返してやがる。

本来、俺もハザマも、自分の思考を全て共有しているわけじゃない。ハザマが俺の知識を手にしたのは、『俺』と『ハザマ』が曖昧であり、一人の精神世界に二つの魂があったからこそ起きた現象だ。あそこでハザマは、世界から俺を観測（みる）て『俺という存在の知識』を得た。使いこなせるかどうかは別だが。
冷静になって考えれば、俺が『蒼の魔導書』を使えることを前提に入れた躰だ。『蒼』の知識を伴う浸食を防げてもおかしくはない。だから今現在、俺とハザマは全くの別物へと変わった。故に行おうと思わなければ知識、思考をを共有することもない。

……が、だ。

「うう……また病室に行くのも気まずいですよねぇ……せっかく仲直りできたと思ったのに、これじゃ私のストレスが溜まりっぱなしじゃないですか……どうしたらいいんでしょうか……」

『だぁぁあああああああ！！　うるっっせぇんだよハザマちゃん

よォ！！！　ぶち殺されてぇか、ああ！？』

独り言もいい、落ち込むなら勝手にやってろ、だがハザマはわざわざ俺に思考を共有してくる。俺に話しかけるように、だ。
正直うざい、面倒くさい、耳障りにもほどがある。やることはないがわざわざ封印してくれた相手に誰が好き好んで話しかけるか。
そんな俺の思考を無視して話しかけるこいつに、聞こえもしない舌打ちをした。

「殺されたくはないんですけど……正直殺されるよりもショックですよね」

『あのリスに嫌われたことか？　はっ、獣人形の末裔相手によくやるなお前もよ』

人形、というのは黒き獣への戦力として、獣の遺伝子を受け身体強化された者たちの揶揄だ。俺の知識を得たこいつなら知っているだろう。
どうでもいいが、俺が使うことになるだろう躰があの獣人形とともに居ることすら、苛立って仕方ない。
いや、苛立つどころの話じゃない。ハザマとあの女と笑っている光景、『俺ははっきりとあの光景に嫌悪を抱いている』。

『なんだったら俺がお前を殺して躰を貰ってやるが？　悩みは消えて綺麗さっぱりだろうが』

「いえそれ綺麗さっぱり私が消えてますから！　いいですよねぇ……貴方は悩みがなさそうで」

書類仕事も全くしていませんでしたし……そ、そう続けるハザマを鼻で笑う。やる必要がなかっただけだ。『面倒を無くすために』作ったこの躰と魂（ハザマ）に任せない理由が存在しない。
そもそもハザマの今抱いている悩みすら、俺じゃなくても笑い種のものだった。

『お前がバカなだけなんだよ、あの女に嫌われた？　んなこと俺が知ったことか』

「いやそうなんですけど、ですが……」

『ですがも糞もあるか。俺がお前の立場だったらあの女なんざ疾うの昔に切り捨てている。魔獣にでも公開レイプされてんのがお似合いだろうよ』

どうせこの世界でもループ前にはイカルガへと出張させている。
獣の末裔であることに一応警戒はしてるが、カグツチ、舞台に上がることすらない人形だ。俺としては死んだとしてもなんの問題もない。
むしろここまで俺を苛つかせることを考えれば、進んで死んでくれるとありがたい。

「……そう、ですか？」

『そうに決まってんだろ。そもそもお前が何を間違えた？　わざわざミスをカバーするために負傷してそのことについて注意して。んでなんでお前が悩む。悩むのはあの女の役目だろうが」

だから苛立つ。鬱陶しい。反吐が出るほどあの女にとって善人的な行動をとっておきながらこれだ。

『俺から見れば無駄だらけだが、なにも間違いをしてるわけじゃねぇだろ、お前は。んなどうでもいいことを俺に愚痴るんじゃねぇ』

「――――――」

その言葉を言ったとき、なぜかハザマは言葉を止めた。
言葉はなかったが思考をダイレクトにぶつけていたこいつからは、なんとなくだが驚きを読み取ることができた。

『……んだよ』

「あーいえ、貴方がそう言って擁護してくれるとは思わなかったので……少し驚きまして。ありがとうございます」

聞いて内心舌打ちする。なに助言するようなことを俺は言っているのだと。明らかに『俺』らしくない。

その言葉を区切りに、俺は言葉を返すことをやめた。
「ふふふ、そうですね、私からは立場的にほめれませんけど他の人なら……」となにやらハザマは呟き、その表情から自分の悩みに対して終着点を見つけたことを理解する。

意味が無いことだ。どうせループする世界。すぐ先に終わりが見えているというのなら、たかが一回程度の足止めは許容できる。
今の俺という存在に睡眠は必要としない。意識を落とすことが睡眠と呼べるのなら、今から俺がやろうとしていることがそうなのだろう。

ただ、ハザマという存在が居るこの世界、その異常がこの世界のループを止めたとしたら？
それでもかまわない。数分程度なら、俺の意思で俺という存在がこの躰を動かすことができる。真の蒼が現れた場合、観測(みる)られるのに、数分は長すぎる。

俺がやることは大きくは変わらない。
それを確認したのち、相変わらず自身の悩みの解決策を考えているハザマに小さく舌打ちし、俺は意識を落とした。

ステージ2（後書き）

一応マコトさんの失敗については、「一般の諜報員」の正義感がごっちゃな状態な人がまあこんな失敗もするだろう、というのを加速させたものです。とりあえず補足とかはいずれまた……

ようやく本格的に『真主人公』の語りを書けそうです。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n5681q/

統制機構諜報部のハザマさん

2011年11月17日20時10分発行